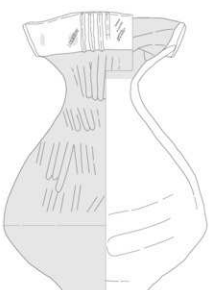
鍛冶谷・新田口遺跡 XII
前谷遺跡 I

埋蔵文化財発掘調査報告書



２０２４

埼玉県戸田市教育委員会

はじめに

埼玉県の南東部に位置する戸田市は、荒川の自然に恵まれ、古くから交通の要衝として発展してきました。現在は交通の利便性から都心部のベッドタウンとして市街地化が進み、人口14万人を超える都市に成長しています。

近年、まちの景観の変化とともに社会的、文化的な環境も変わってきておりますが、古来から受け継がれてきた伝統や歴史を守り、人々の絆を一層強いものとするために、文化財の保護が求められているところです。

今回報告いたします鍛冶谷・新田口遺跡第12次発掘調査は、個人住宅建設に伴い令和3年に緊急発掘調査が行われたものです。また前谷遺跡第1次発掘調査は、店舗建設に伴い昭和47年に発掘調査が行われ、令和4年度から再整理を行ったものです。

今回の発掘調査・再整理により、弥生時代後期から近代に生活を営んだ人たちが遺した貴重な資料を多数検出し、当時の人々の生活や土地利用のあり方などを知る良好な資料を得ることができ、地域の遺跡の性格の一端を明らかにすることができました。本書が、戸田をより深く学習するための一助となることができましたら幸甚に存じます。

最後になりましたが、本事業の遂行にあたり、御尽力、御協力を賜りました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

令和6年3月

戸田市教育委員会

教育長　戸ヶ﨑　勤

例　　言

1．本書は、鍛冶谷・新田口遺跡第12次発掘調査（以下「鍛冶谷・新田口12次」という）、前谷遺跡第1次発掘調査（以下「前谷1次」という）の発掘調査報告書である。

2．鍛冶谷・新田口12次は、事業者による個人住宅建設に伴う緊急発掘調査として、埼玉県戸田市教育委員会（以下「市教委」という）が実施した。前谷1次は、事業者による店舗建設に伴う緊急発掘調査として市教委が実施した。

3．鍛冶谷・新田口12次は令和3年9月29日から10月12日まで行い、整理作業・報告書作成作業は令和4年9月1日から令和5年5月30日まで市教委が実施した。前谷1次は、昭和47年8月23日から9月6日まで行い、昭和53年3月31日に『前谷遺跡発掘調査概要』を刊行した。令和4年度に前谷1次の再整理を行い、令和6年1月まで整理作業・報告書作成作業を市教委が実施した。

4．鍛冶谷・新田口12次の調査及び整理作業、報告書作成、前谷1次の再整理及び報告書作成に要した経費は、全て戸田市の負担による。

5．本書は市教委が刊行し、今井源吾が編集及び執筆を行った。

6．鍛冶谷・新田口12次の発掘現場の記録写真及び出土遺物、前谷1次の出土遺物の撮影は今井源吾が行った。

7．本書の版権は、市教委が保有する。発掘調査成果の周知、活用、学術研究、教育等を目的とする場合は、本書の一部を無償で複製し、利用できるものとする。

8．出土遺物及び発掘調査の各種データ等は全て市教委が保管し、活用を図るものとする。

9．本事業は以下の組織により実施した。

【埼玉県戸田市教育委員会】

教　育　長　戸ヶ崎勤
教育部長　川和田亨（令和5年4月1日から）
　　山上睦只（令和5年3月31日まで）
次　　長　梶山　浩（令和5年4月1日から）
　　川和田亨（令和5年3月31日まで）
　　星野正義（令和4年3月31日まで）
生涯学習課長　鎌田陽子
　　高屋勝利
生涯学習課主幹　本橋　洋
生涯学習課主事　金子遥奈
　　今井源吾（出土品整理・報告書作成担当）

発掘調査及び整理作業参加者

榎本　昇　榎本眞由美　川合アケミ　中地夏乃子　永瀬洋美　中信節子　山岸　榮

10．調査及び本書を作成するにあたり、次の方に御指導、御協力を賜った。記して謝意を表すものである。

若松良一　　（敬称略　五十音順）

凡　　例

1．　挿図中の地図、検出遺構実測図等の方位は、図中に真北の方位を示した。

2．　本書の国家座標、緯度、経度は世界測地系に則している。

3．　遺構番号は調査の進捗過程で、そのプランの確認された順に遺構の種別ごとに付したが、整理・報告書作成作業の過程で遺構番号を振り直している。なお、遺構略号は下記のとおりである。前谷１次の遺構名は『前谷遺跡発掘調査概要』に基づいているが、「方形周溝墓」の表記は「周溝状遺構」に変更している。

SX：周溝状遺構　SA：柵跡　SD：溝状遺構　SK：土坑　P：ピット

4．　鍛冶谷・新田口 12 次、前谷１次の土層観察における色調及び遺物観察における色調は、『新版　標準土色帖』 2013 年度版（小山正忠・竹原秀雄　編・著、農林水産省農林水産技術会議事務所監修、 財団法人日本色彩研究所　色票監修、日本色研事業株式会社発行）を参考にした。

5．　遺構断面図内の土層説明は、全て記録者の記載に従う。

6．　遺物拓影図は、向かって左側に内面を、右側に外面を、底面を下位に示した。ただし外面のみの場合には、 向かって左側に外面を示した。

7．　遺物の種別のうち、弥生時代後期後半から平安時代に属する土器は、すべて「土師器」と表記した。

8．　遺物実測図のトーンは次の通りである。

赤彩：　　黒色処理：

9．　遺物実測図のうち、須恵器の断面は黒色にし、他の遺物は白抜きにした。

10．　遺物観察表法量の（　）の値は残存部からの推定値を示し、〈　〉は残存最大値を示す。

11．　遺物実測図及び遺構実測図の縮尺はすべて挿図中に示した。

12．　写真図版の縮尺は任意である。

13．　鍛冶谷・新田口 12 次の標高は、T．P（東京湾中等潮位）を基準とした。

14．　鍛冶谷・新田口 12 次の遺構実測図の水糸レベルは、すべて標高 2.30m に統一した。前谷１次の水糸レベルは不明のため記載していない。

15．　土層断面図の層位番号は、基本土層と共通するものはローマ数字、個別の遺構覆土の層位はアラビア数字で示した。

16．　出土遺物の注記は、下記の原則に基づき行った。鍛冶谷・新田口遺跡の遺跡略号は KS、前谷遺跡の遺跡略号は MY としている。

例：KS．　12．　SD　－　1．　1

遺跡略号　調査次　遺構種別　遺構番号　遺物番号

表面採取遺物や撹乱層出土遺物については、遺跡略号及び調査次のみを記載した。

なお、写真図版中の遺物写真には、旧遺構番号のまま注記を修正していないものがある。

目　次

はじめに

例言／凡例

目次／挿図目次／挿表目次／図版目次

第１部　戸田市の周辺環境と歴史の概要

第１章　周辺環境と歴史の概要

第１節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第２部　鍛冶谷・新田口遺跡第12次発掘調査

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

第２節　発掘調査と整理作業の経過

1　発掘調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

2　整理作業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

第２章　遺跡・調査の概要

第１節　遺跡・調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

第２節　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

第３章　検出された遺構と遺物

第１節　弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構と遺物

1　柵跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

2　ピット・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

第２節　近世から近代の遺構と遺物

1　溝状遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

2　土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

3　ピット・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

4　遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

第４章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

参考文献

第３部　前谷遺跡第１次発掘調査

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

第２節　発掘調査と整理作業の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

第２章　検出された遺構と遺物
第１節　弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構と遺物
1　周溝状遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
2　土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
第２節　平安時代以降の遺構と遺物
1　溝状遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
2　土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
3　ピット・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
4　不明遺構・遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
第３章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
参考文献
写真図版
報告書抄録 / 奥付

挿図目次

第１図　埼玉県の地形・・・・・・・・・・1
第２図　戸田市域の地形・・・・・・・・・2
第３図　戸田市の遺跡位置図・・・・・・3
第４図　鍛冶谷・新田口遺跡調査区位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第５図　調査区全体図・・・・・・・・・9
第６図　調査区等高線図・・・・・・・・・11
第７図　基本土層図・・・・・・・・・・・11
第８図　第１号柵跡遺構実測図・・・・・12
第９図　ピット実測図・・・・・・・・・・13
第 10 図　第１号溝状遺構実測図・・・・14
第 11 図　第１号溝状遺構出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・14
第 12 図　第２号溝状遺構・第１号土坑・P09 実測図・・・・・・・・・・16
第 13 図　遺構外出土遺物実測図・・・・16
第 14 図　前谷遺跡調査区位置図・・・・19
第 15 図　前谷１次全体図・エレベーション図・・・・・・・・・・・・・・・・21
第 16 図　第１号周溝状遺構出土遺物実測図（1）・・・・・・・・・・・・・・22
第 17 図　第１号周溝状遺構出土遺物実測図（2）・・・・・・・・・・・・・・23
第 18 図　第２号周溝状遺構出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・24
第 19 図　第３号土坑出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
第 20 図　第１・２号溝状遺構実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
第 21 図　第１・２号溝状遺構出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・28
第 22 図　第３～８号溝状遺構実測図

・・・・・・・・・・・・・・30
第23図　第3号溝状遺構出土遺物実測図（1）
・・・・・・・・・・・・・・・31
第24図　第3号溝状遺構出土遺物実測図（2）
・・・・・・・・・・・・・・32
第25図　第3号溝状遺構遺出土物実測図（3）
・・・・・・・・・・・・・・・33
第26図　第4・7・8号溝状遺構出土遺物
実測図・・・・・・・・・・・33
第27図　第1・2・4・5号土坑実測図
・・・・・・・・・・・・・・・38
第28図　第1・4号土坑出土遺物実測図
・・・・・・・・・・・・・・・38
第29図　遺構外出土遺物実測図（1）
・・・・・・・・・・・・・・・40
第30図　遺構外出土遺物実測図（2）
・・・・・・・・・・・・・・・41

挿表目次

第1表　戸田市の遺跡概要・・・・・・・3
第2表　P02・P04・P05・P07集計表
・・・・・・・・・・・・・・・12
第3表　P01・P03・P06・P08集計表
・・・・・・・・・・・・・・・13
第4表　第1号溝状遺構出土遺物観察表
・・・・・・・・・・・・・・・・15
第5表　P09集計表・・・・・・・・・・16
第6表　遺構外出土遺物観察表・・・・・16
第7表　遺物出土点数・重量一覧・・・・17
第8表　第1号周溝状遺構出土遺物観察表
（1）・・・・・・・・・・・・・・24
第9表　第1号周溝状遺構出土遺物観察表
（2）・・・・・・・・・・・・・・25
第10表　第2号周溝状遺構出土遺物観察表
・・・・・・・・・・・・・・・25
第11表　第3号土坑出土遺物観察表
・・・・・・・・・・・・・・・26
第12表　第1・2号溝状遺構出土遺物観察
表・・・・・・・・・・・・・・29
第13表　第3号溝状遺構出土遺物観察表
（1）・・・・・・・・・・・・・・34
第14表　第3号溝状遺構出土遺物観察表
（2）・・・・・・・・・・・・・35
第15表　第3号溝状遺構出土遺物観察表
（3）・・・・・・・・・・・・・36
第16表　第4・7・8号溝状遺構出土遺物
観察表・・・・・・・・・・・・36
第17表　第1・4号溝状遺構出土遺物観察
表・・・・・・・・・・・・・・39
第18表　遺構外出土遺物観察表（1）
・・・・・・・・・・・・・・・41
第19表　遺構外出土遺物観察表（2）
・・・・・・・・・・・・・・・42
第20表　遺物出土点数・重量一覧・・・43

図版目次

図版１
1　調査区完掘　（南西から）
2　第１号柵跡完掘　（南東から）
3　第２号・第３号ピット断面　（南東から）
4　第２号ピット完掘　（南東から）
5　第４号ピット断面　（北から）
6　第４号ピット完掘　（北から）
7　第５号ピット断面　（西から）
8　第５号ピット完掘　（北西から）

図版２
1　第７号ピット完掘　（北から）
2　第８号ピット完掘　（北から）
3　第１号溝状遺構断面（南から）
4　第１号溝状遺構完掘（南から）
鍛冶谷・新田口 12 次出土遺物

図版３
1　第１号周溝状遺構　（北東から）
2　第１号周溝状遺構遺物出土状況
3　第２号周溝状遺構　（西から）
4　第２号周溝状遺構遺物出土状況
5　第１・３号溝状遺構　（北西から）
6　第２号溝状遺構　（南東から）
7　第４号溝状遺構　（南東から）
8　第３号土坑（北東から）

図版４
前谷１次出土遺物①

図版５
前谷１次出土遺物②

図版６
前谷１次出土遺物③

図版７
前谷１次出土遺物④

図版８
前谷１次出土遺物⑤

図版９
前谷１次出土遺物⑥

第１部　戸田市の周辺環境と歴史の概要

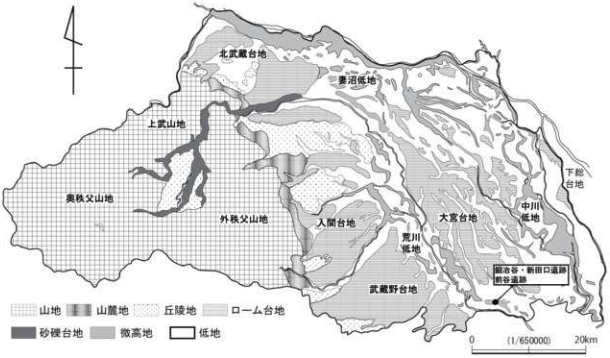
第１章　周辺環境と歴史の概要

第１節　地理的環境

戸田市は、埼玉県最南端部に位置し、東西約 6.0km、南北約 3.0km、面積 18.19 ㎢の東西に細長い形状を呈する。北はさいたま市、東は蕨市及び川口市にそれぞれ地続きで接し、西の朝霞市及び和光市、南の東京都板橋区及び北区とは、荒川を隔てて接している。市域には、国道 17 号線（旧中山道）や新大宮バイパスが南北に走り、首都高速５号線、東京外郭環状道路、JR 埼京線の開通により交通の利便性が高まり、急激な市街地化が進んでいる。都心に近い立地のため、工場や流通センターが数多く所在する。

戸田市の地形は、約２万年前の最終氷期に形成された開析谷を、利根川等の河川が運搬した土砂が充填してできた平坦な沖積低地 (荒川低地) に位置している。荒川低地の下流には標高 3m ほどの微高地が発達し、市内では中央部を西は美女木から上戸田を通り、東は川口市まで荒川にそって分布し、この微高地の南北に低地が溜のように広がる。この微高地は自然堤防とする説もあるが、荒川右岸に微高地が確認できないことや、形状が団子状を呈していることから浅谷もしくは海成段丘との指摘もある。

市内の地層は、戸田市本町付近では地下 50m の地点に開析谷の基底礫層があり、その上に軟弱な沖積層が充填している。沖積層の上部２～３m の層は戸田・蕨地域ではよく見ることがで



第１図　埼玉県の地形

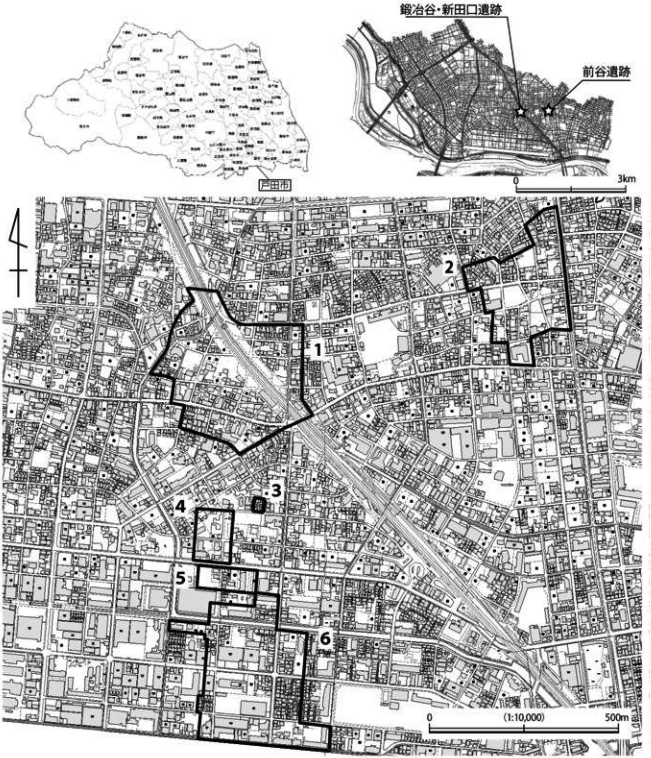
きる黄褐色・灰白色のシルト質粘土層で、戸田市においては遺跡の検出面としている層である。この層は岩質が均一である点や、微低地にはヨシ・マコモなどの水辺植物の遺体からなる泥炭層が挟在していることから、荒川低地を流れていた旧利根川が中川低地に東遷し、デルタ的環境から流水の影響の少ない湖沼・潟的な環境に移行した後に形成された層である。形成時期については、泥炭層の炭素年代が 1640 ± 60yBP とされることから、弥生時代末から古墳時代前期の時期にあたり、市内に初めて集落が形成された当時は微高地の周囲には湖沼・潟的な環境が広がっていたとみられる。

第 2 節　歴史的環境

市内では弥生時代中期までの遺構は確認されておらず、縄文土器などの遺物が散発的に出土するのみである。市域内の微高地上に遺跡が形成されるようになるのは弥生時代後期からとなる。

弥生時代後期末から古墳時代前期では、前谷遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡、南町遺跡、南原遺跡、上戸田本村遺跡及び根木橋遺跡で遺構・遺物が検出されている。この中でも昭和 51 年 (1976) に埼玉県選定重要遺跡に選定された鍛冶谷・新田口遺跡は、当該期の方形周溝墓（周溝状遺構）群や集落跡、木器の出土などから全国的に有名である。上戸田本村遺跡では、第 2・3 次調査で、環濠と思われる溝状遺構と溝の東部に密集する竪穴建物群を検出していることから、上戸田本村遺跡周辺が当該期の環濠集落であった可能性が高い。中期の遺構・遺物が検出された遺跡は南原遺跡第 2 次調査 B 区で竪穴建物跡 3 基、第 9 次調査で井戸跡 1 基、第 10 次調査で竪穴建物跡 1 基と、土坑 2 基が確認されたのみである。

第 2 図　戸田市域の地形



第３図　戸田市の遺跡位置図

第１表　戸田市の遺跡概要

No.	遺跡名	所在地	種別	主な時代	立地
1	鍛冶谷・新田口遺跡	戸田市上戸田３・５丁目、本町３丁目、大字新曽	集落跡	弥生後期・古墳前期・平安・中世	微高地
2	前谷遺跡	戸田市上戸田２丁目	集落跡・城館跡	弥生後期・古墳前期・平安・鎌倉・南北朝・室町	微高地
3	大前遺跡	戸田市本町３丁目	集落跡	古墳前期・平安・南北朝・室町	微高地
4	上戸田本村遺跡	戸田市本町３丁目	集落跡・円墳	弥生後期・古墳前期/後期・中世	微高地
5	南町遺跡	戸田市南町	集落跡	古墳前期・中世	微高地
6	南原遺跡	戸田市南町	集落跡・円墳	弥生後期・古墳前期/後期・奈良・平安・鎌倉	微高地

古墳時代後期は、上戸田本村遺跡や南原遺跡周辺で群集墳が形成される時期である。上戸田本村遺跡内には、「くまん塚」と呼ばれた円墳が所在し、そこから横穴式石室の石材の一部と直刀２振が出土している。また、発掘調査では鬼高式期の竪穴建物跡２基、馬形埴輪や人物埴輪、円筒埴輪が出土した古墳周溝が１基検出されている。南原遺跡では、第１次調査で人物埴輪、円筒埴輪等が出土した円墳１基、第２次調査Ａ区で円形周溝墓（円墳）１基、第３次調査Ｄ区で鬼高式期の竪穴建物跡１基と屋外竈１基、第４次調査で円形周溝墓（円墳）２基、６次調査で円形周溝墓（円墳）１基、第８・９次調査で馬形埴輪、人物埴輪、家形埴輪、円筒埴輪等が出土した古墳周溝が２基検出されている。第 12 次調査では、人物埴輪、鶏形埴輪、円筒埴輪が出土した古墳周溝が１基検出されている。

平安時代は南原遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡及び前谷遺跡で竪穴建物跡、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑群、柵跡、畝跡が検出されている。

中世は、市の西部からさいたま市の南西部がかつての佐々目郷に当たり、鎌倉時代から戦国時代にかけて鶴岡八幡宮の社領であった。当該期は大前遺跡、上戸田本村遺跡、前谷遺跡、南原遺跡、南町遺跡及び美女木八幡社脇遺跡で掘立柱建物跡、溝状遺構、井戸跡などが検出されている。

近世は、市の大半の村が幕府の直轄領となり、徳川将軍家の鷹場として使用されていたことがわかっている。また、五街道の一つである中山道の整備に伴い、荒川を渡る「戸田の渡し」が板橋宿と蕨宿を結ぶ交通の要所として機能していた。当該期は鍛冶谷・新田口遺跡及び前谷遺跡で溝状遺構や井戸跡が、美女木八幡社脇遺跡では美女木八幡社を廻っていた堀の跡が検出されている。

第２部　鍛冶谷・新田口遺跡第１２次発掘調査

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

令和３年７月に、事業者から市教委に対し、戸田市上戸田５丁目 13 番地６における 63.92 ㎡の個人住宅建設事業計画及び埋蔵文化財の取り扱いについて相談があった。

市教委では、事業計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地内（鍛冶谷・新田口遺跡）に該当しており、建設工事中に埋蔵文化財が発見される可能性が高いため、事業者に対し工事着手前に試掘調査を実施するよう指導した。

これを受け、令和３年８月２日に事業者から市教委に対し試掘確認調査の依頼書が提出され、試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は市教委が令和３年８月 31 日に実施し、弥生時代末から古墳時代前期に帰属する柵跡及びピットと、同時期に帰属するものと考えられる土器を確認した。

この試掘調査の結果に基づき市教委と事業者間で埋蔵文化財の保存について協議をもち、基礎工事等で埋蔵文化財の破壊が避けられない部分（28.3 ㎡）については記録保存のための緊急発掘調査を行い、残りの部分（35.62 ㎡）は、遺構確認面から 0.3m 以上の保護層を確保することにより埋蔵文化財の現状保存を実施することで合意した。

令和３年８月２日に、事業者から文化財保護法第 93 条の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出され、市教委は令和３年９月 27 日付戸教生第 1105 号にて埼玉県教育委員会（以下「県教委」という）に宛て進達した。

これを受け、県教委から事業者に対し、令和３年９月 28 日付教文資第４-1335 号で、事業計画地内における工事着手前に発掘調査を実施するよう指示があった。

発掘調査に当たり、事業者は市教委に対し、令和３年９月９日付で発掘調査の依頼書を提出した。また、令和３年９月 24 日付戸教生第 1101 号にて事業者及び市教委の二者による「個人住宅建設予定地にかかる埋蔵文化財の取扱いに関する協定書」を締結した。

そして、文化財保護法第 99 条に基づき、市教委から県教委宛てに令和３年９月 28 日付戸教生第 1120 号にて埋蔵文化財発掘調査の通知を提出し、鍛冶谷・新田口 12 次を実施することとなった。

第２節　発掘調査と整理作業の経過

１　発掘調査

鍛冶谷・新田口 12 次は、令和３年９月 29 日から 10 月 12 日まで実施した。調査面積は、28.3 ㎡である。９月 29 日に機材搬入、発掘現場の仮囲い、重機による表土掘削を行った。掘削で生じた排土は調査区外に仮置きした。30 日に発掘調査補助員を動員し、人力による遺構確認を行い、

遺構検出状況の図面作成と写真撮影を行った。発掘調査での写真撮影は、全てデジタル一眼レフカメラNikonD5100を使用し、JPEG形式にて撮影した。また、委託業者による調査区の測量、基準杭打設を令和3年10月7日に行った。30日から検出された遺構の番号付与及び土層観察用ベルトを設定し、遺構掘削を開始した。9月30日から10月7日まで遺構掘削と遺構平面図、土層断面図作成、出土遺物の取り上げを行った。平面図は、全て簡易遣り方測量で実施した。調査は、10月7日までに終了し、10月12日に重機により調査区の埋め戻し・整地を行い、機材を撤収し、全ての現場作業が完了した。

2　整理作業

当該調査に係る出土品及び図面の整理作業、報告書作成は令和4年9月1日から令和5年5月30日まで生涯学習課埋蔵文化財等整理室及び戸田市立郷土博物館博物館事務室にて実施した。

発掘現場で採取した出土品は、洗浄・注記・接合を行った。その後、報告書に掲載するもの抽出・実測図作成・拓影採取を行った。採取した拓影はスキャナにてコンピュータに取り込んだ後、Adobe Photoshopにて修正し、デジタルデータ化した。出土遺物実測図、発掘現場で遺構平面図、土層断面図等の図面類も、スキャナでコンピュータに取り込み、デジタルデータ化した。これらの各種図面データは、Adobe Illustratorにてデジタルトレースを行った。

遺物写真は、NikonD610、105㎜単焦点マクロレンズを使用してRAW（NEF）形式で撮影し、Digital Photo Professionalにより現像処理、ホワイトバランス等の補正を行い、tiff形式・jpeg形式ファイルを作成した。版下は、Adobe Illustrator、Adobe InDesignにて作成し、PDF形式ファイルにて入稿した。

第2章　遺跡・調査の概要

第1節　遺跡・調査の概要

鍛冶谷・新田口遺跡の名称は、この地域がかつて「鍛冶谷（屋）」、「新田口」と呼ばれていた二つの地域に所在していたことに由来する。この遺跡は昭和42年に戸田市で最初の発掘調査が行われた遺跡であり、昭和51年には弥生時代から古墳時代に低地に形成された稀有な集落遺跡として、埼玉県選定重要遺跡に選定されている。また、昭和57年から60年には東北・上越新幹線および埼京線敷設に伴う大規模な発掘調査が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（以下「事業団」という）によって行われ、弥生時代後期から古墳時代前期の方形周溝墓（周溝状遺構）群や竪穴建物群、またこれに伴う大量の遺物の検出により、当該期の大規模な低地式集落の発掘調査事例として注目を集めた。

鍛冶谷・新田口遺跡は、本調査を含めてこれまでに13回に渡る発掘調査が行われている。市教委調査が8回、戸田市遺跡調査会（以下「市調査会」という）調査が4回、事業団調査が1回である。なお、下記の「周溝状遺構」は報告書では「方形周溝墓」と記載されているものも、表記を統一する

ために「周溝状遺構」の語を使用し、竪穴住居についても竪穴建物で統一している。

鍛冶谷・新田口１次は、鯉のぼりのポールを建てる際に偶然土器の破片が発見されたことをきっかけとし、市教委が学術調査として昭和 42 年８月６日から 12 日までの期間で実施した。発掘調査はＡ区、Ｂ区の２地点において行われ、Ａ区では弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構３基、Ｂ区では同時期の周溝状遺構２基と竪穴建物１基が検出された。周溝状遺構から出土した土器は遺存状態が良好であり、Ｓ字状口縁を有する甕形土器をはじめとする東海地方系の土器も出土した。また、竪穴建物の貯蔵穴からは甑セットが略完形で出土した。

鍛冶谷・新田口２次は、鍛冶谷・新田口１次の継続調査として市教委が昭和 43 年７月 26 日から８月２日までの期間で実施した。Ａ区では弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構２基が検出された。また、Ｂ区では、鍛冶谷・新田口１次で既に検出されていたものを含め計７基の周溝状遺構が検出された。

事業団の調査は、東北・上越新幹線、埼京線敷設工事に伴う緊急発掘調査として、昭和 57 年４月から昭和 60 年３月までの約３年間に渡って実施された。なお、市教委による鍛冶谷・新田口１・２次の調査区は、この調査で再調査が行われている。調査で検出された遺構は、竪穴建物 37 基、周溝状遺構 95 基、井戸跡 82 基、土坑 166 基、溝状遺構 232 条である。竪穴建物、周溝状遺構は全て弥生時代後期から古墳時代前期に帰属するものであり、当該期の集落の大部分が発掘された重要な調査事例となっている。

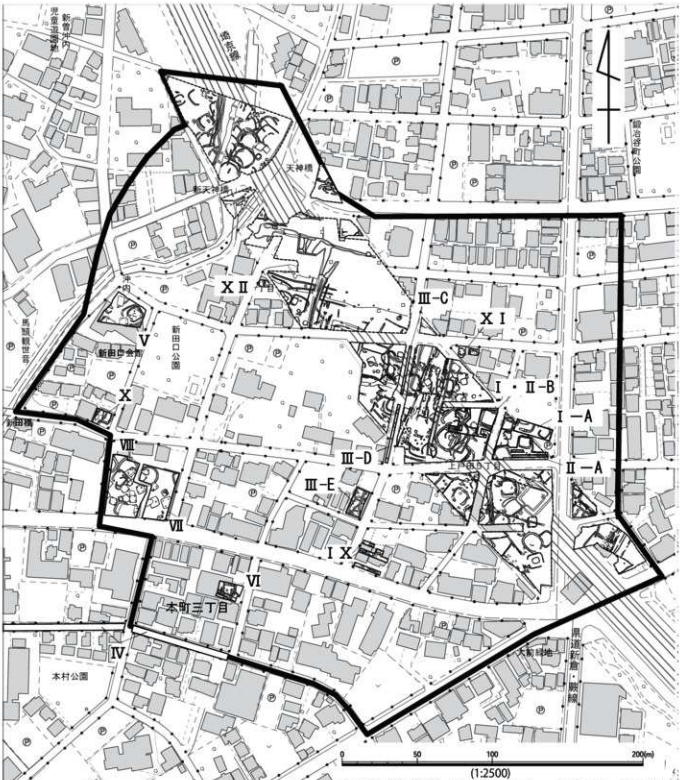
鍛冶谷・新田口３次では、下水道整備工事に伴う緊急発掘調査としてＣ・Ｄ区が、個人住宅建設に伴う緊急発掘調査としてＥ区が調査された。発掘調査は市教委が主体となり、昭和 57 年 10 月５日から 30 日までの期間で実施された。Ｃ区からは溝状遺構５条、Ｄ区からは溝状遺構４条と土坑７基を検出した。これらのうち、Ｃ区の溝状遺構２条は事業団による調査によって、同一の周溝状遺構に帰属するものであることが判明している。また、Ｄ区の溝状遺構２条についても、それぞれが周溝状遺構の一部であったことが判明している。Ｅ区からは周溝状遺構３基と溝状遺構４条が検出された。

鍛冶谷・新田口４次は昭和 58 年に市教委が実施したが、調査内容については不明である。

鍛冶谷・新田口５次は、事務所建設に伴う緊急発掘調査として市調査会が平成元年２月１日から２月 23 日までの期間で実施した。調査区からは弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構２基、竪穴建物２基や土坑１基、溝状遺構７条が検出された。周溝状遺構は１辺を重複して入れ子状に検出され、周溝の内側に環状に巡るピット列と方形に並ぶ４基のピットが確認された。周溝状遺構が「周溝を有する建物跡」であった可能性を示唆する調査事例である。検出された竪穴建物はいずれも焼失住居であり、炭化材等が多く検出された。

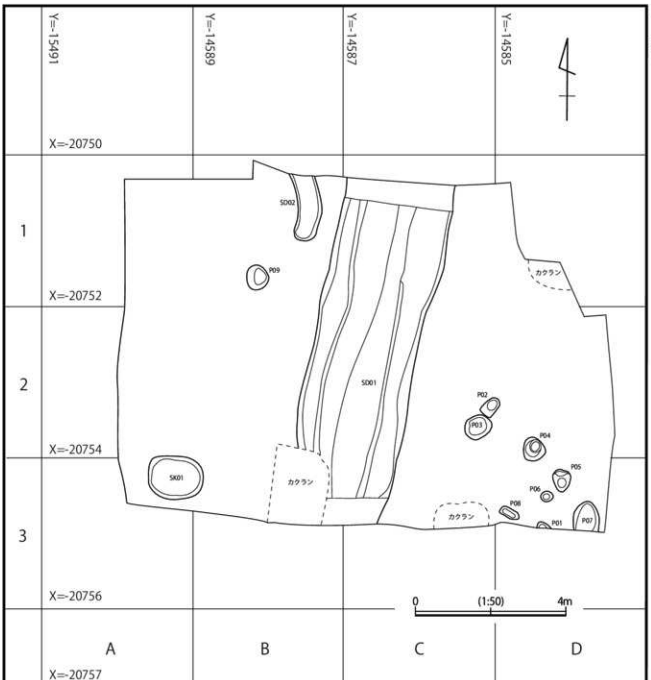
鍛冶谷・新田口６次は、寄宿舎建設に伴う緊急発掘調査として市調査会が平成４年１月 16 日から２月 26 日までの期間で実施した。調査区からは弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構１基、溝状遺構１条、土坑１基、近世（18 ～ 19 世紀）の土坑１基、堀跡１条が検出された。

鍛冶谷・新田口７次は、共同住宅建設に伴う緊急発掘調査として市調査会が平成９年９月 20 日から 11 月 27 日までの期間で実施した。調査区からは弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物６基、周溝状遺構２基、土坑４基が検出された。竪穴建物は計６基のうち５基から多量の炭化物が検出され



I　第1次調査（1967）：戸田市教育委員会調査（塩野ほか 1968・塩野ほか 1969）
II　第2次調査（1968）：戸田市教育委員会調査（塩野ほか 1969）
III　第3次調査（1982）：戸田市教育委員会調査（伊藤ほか 1984）
IV　第4次調査（1983）：戸田市教育委員会調査（未報告）
V　第5次調査（1989）：戸田市遺跡調査会調査（小島 1990）
VI　第6次調査（1992）：戸田市遺跡調査会調査（小島 1994）
VII　第7次調査（1997）：戸田市遺跡調査会調査（小島 2001）
VIII　第8次調査（1999）：戸田市遺跡調査会調査（小島 2005）
IX　第9次調査（2015）：戸田市教育委員会調査（岩井ほか 2015）
X　第10次調査（2015）：戸田市教育委員会調査（岩井 2016）
XI　第11次調査（2019）：戸田市教育委員会調査（今井2021）
XII　第12次調査（2021）：戸田市教育委員会調査（本報告）
財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査（1982～1985）（西口ほか 1986）

第4図　鍛冶谷・新田口遺跡調査区位置図



第５図　調査区全体図

ており、焼失住居であった可能性が指摘されている。周溝状遺構は、第１号周溝状遺構が略円形を呈しており、溝中土坑からは良好な遺存状態で土器が出土している。また、第２号周溝状遺構は覆土中層に多量の炭化物が混入している箇所が見られ、周辺から良好な遺存状態で土器が出土している。第３号・４号土坑からは比較的多量の土器が出土しており、小型の坩形土器やＳ字状口縁甕型土器、頸部に凸帯を有する壺形土器が出土している。

鍛冶谷・新田口８次は、共同住宅建設に伴う緊急発掘調査として市調査会が平成 11 年７月 21 日

から９月21日までの期間で実施した。調査区からは弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物12基、周溝状遺構７基が検出された。

鍛冶谷・新田口９次は、共同住宅建設に伴う緊急発掘調査として市教委が平成27年１月６日から平成27年１月29日までの期間で実施した。調査区からは弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構５基、溝跡１条、土坑１基、ピット４基、中世の溝跡１条、井戸跡４基、土坑１基、近世の溝跡５条、井戸跡２基、土坑３基、ピット２基が検出された。中世の第３号溝跡と第２号井戸跡は「排水施設」であった可能性があり、また、近世の溝跡は地割溝であった可能性があることが指摘されている。

鍛冶谷・新田口10次は、個人住宅建設に伴う緊急発掘調査として市教委が平成27年４月６日から５月７日までの期間で実施した。検出した遺構は、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の竪穴建物１基、周溝状遺構４基、その他溝状遺構１条、ピット24基を検出した。また、これらの遺構に伴い、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の土師器、土師器転用砥石、中世の板碑が出土した。特に、第２号周溝状遺構からは良好な遺存状態で土器が大量に出土したことが特筆できる。

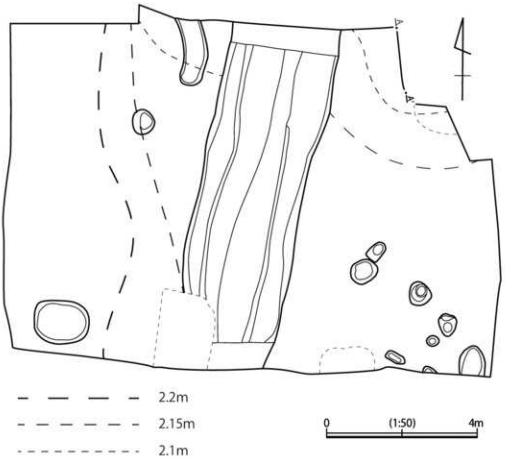
鍛冶谷・新田口11次は、個人住宅建設に伴う緊急発掘調査として市教委が令和元年８月１日から９月30日までの期間で実施した。検出した遺構は、弥生時代後期後半から古墳時代前期の竪穴建物３基、周溝状遺構１基、土坑４基、その他溝状遺構２条、土坑２基、ピット21基を検出した。また、これらの遺構に伴い弥生時代後期後半から古墳時代前期の土師器、石製品、近世の陶磁器などが出土した。

本調査は、事業団調査を除くと12次目の発掘調査となる。今回の調査では、弥生時代後期後半から古墳時代前期の柵跡１基、ピット４基、近世以降の溝状遺構２条、土坑１基、ピット１基を検出した。また、これらの遺構に伴い弥生時代後期後半から古墳時代前期の土師器、平安時代の須恵器、近世・近代の陶磁器、瓦などが出土した。

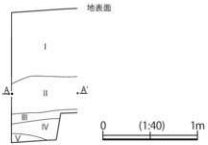
第２節　基本土層

基本土層は、D－１グリッドで確認し、５層に分層した。また、本調査区の遺構確認面の標高は、おおよそ2.1～2.2mであり、顕著な起伏はなく、ほぼ平坦であるが、西から東に傾斜している。

Ⅰ層は、表土撹乱層であり現代の撹乱の影響を受けている。Ⅱ層は、灰褐色土層で近世から近代の耕作土層と考えられる。一部はグライ化し、グライ化しているⅡ－１層とグライ化していないⅡ－２層に分けている。Ⅲ層は、褐色の粘質土層で、本層の上面において遺構を検出したため、遺構確認面とした。湿地植物の根に由来する褐鉄鉱が多く含まれる。Ⅳ層は、黄褐色シルトであり粘性が強い。Ⅴ層は、灰黄褐色の砂質シルト層である。



第６図　調査区等高線図



基本土層　土層説明

A-A'

Ⅰ　盛土

Ⅱ　7.5YR5/1 灰褐色土　しまりやや強　粘性弱　炭化物少量　酸化鉄少量含む

　調査地内では一部グライ化するため、グライ化するⅡ-1、グライ化していないⅡ-2 と分けている

Ⅲ　7.5YR4/3 褐色土　しまりやや強　粘性やや強　酸化鉄中量含む　遺構検出面

Ⅳ　10YR5/6 黄褐色シルト　しまりやや強　粘性強　酸化鉄少量含む

Ⅴ　10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト　しまりやや弱　粘性なし　酸化鉄中量含む

第７図　基本土層図

第３章　検出された遺構と遺物

第１節　弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構と遺物

１　柵跡

第１号柵跡－ SA01（第８図、図版１－２～８、図版２－１）

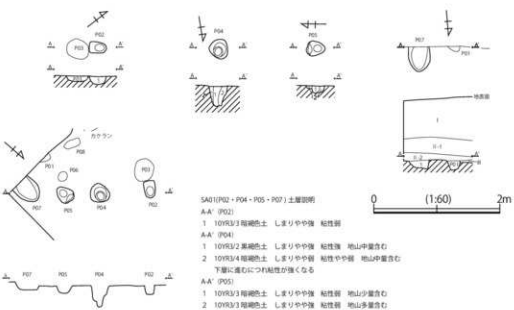
位置：C・D－２・３グリッド。重複関係：なし。平面形・規模：調査区内では４基のピットを確認し、北西から P02・P04・P05・P07 とした。平面形は P02 が台形、P04・P05・P07 が楕円形で、P04・P05 は柱跡が明瞭である。P02 から南壁までの長さは 2.24m である。主軸方位：N － 40°－ W。覆土：ピットごとに覆土を観察した。いずれも自然堆積と考えられる。各ピットの計測値等は第２表に示した。

遺物

出土状況：本遺構からは、遺物は出土していない。

時期

土層から弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる。



第８図　第１号柵跡遺構実測図

第２表　P02・P04・P05・P07 集計表

遺構名	位置（グリッド）	平面形状	長軸長（m）	短軸長（m）	深さ（m）	出土遺物	備考
P02	C・D-２	台形	0.28	0.18	0.12	なし	
P04	D-２・３	楕円形	0.32	0.28	0.32	なし	
P05	D-３	楕円形	0.32	0.24	0.12	なし	
P07	D-３	楕円形	0.33	0.30	0.08	なし	

2　ピット（第９図、図版２－２）

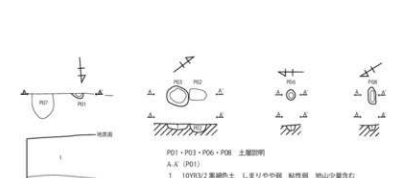
本調査では、弥生時代後期から古墳時代前期のピットを４基検出した。ピットの計測値等は第３表に示した。

遺物

出土状況：本遺構からは、遺物は出土していない。

時期

土層から弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる。



第９図　ピット実測図

第３表　P01・P03・P06・P08 集計表

遺構名	位置（グリッド）	平面形状	長軸長（m）	短軸長（m）	深さ（m）	出土遺物	備考
P01	D-３	不明	0.20	0.08	0.14	なし	
P03	C-２	円形	0.36	0.30	0.08	なし	
P06	D-３	円形	0.16	0.14	0.08	なし	
P08	D-３	楕円形	0.36	0.12	0.08	なし	

第２節　近世から近代の遺構と遺物

１　溝状遺構

第１号溝状遺構―SD01（第10図　図版２－３・４）

位置：B・C－１～３グリッド。重複関係：重複関係なし。平面形・規模：調査区中央に位置し、南側と北側が調査区外に伸びている。西側に側溝が付く。残存部分の長さは 4.3m、溝の上端幅が 1.00 ～ 1.18m、下端幅が 0.18 ～ 0.5m、側溝の上端幅が 0.32 ～ 0.4m、下端幅が 0.1 ～ 0.3m である。確認面からの深さは溝が 0.32m、側溝が 0.1m である。断面形状は逆三角形で、側溝は半円形である。

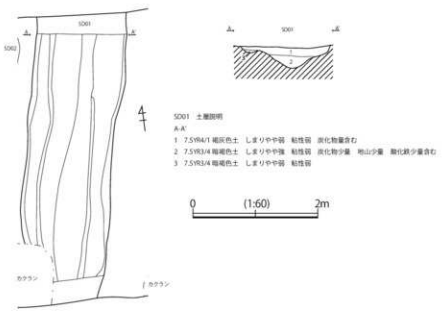
主軸方位：N － 15°－E。覆土：１箇所で覆土を観察した。３層に分層し、自然堆積と考えられる。１層の灰褐色土が溝・側溝を覆っているため、同時期に埋没したと考えられる。

遺物（第 11 図、第４表、図版２）

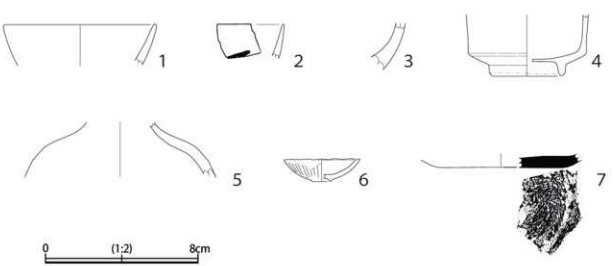
出土状況：本遺構からは、陶磁器９点 66.7g、須恵器１点 12.6g、瓦９点 564.0g、その他 13 点 67.3g の遺物が出土している。この内陶磁器６点須恵器１点を図示した。１はクロム青磁釉をかける明治時代の瀬戸美濃産の碗。２・４の碗は京・信楽産の可能性がある。５は一升徳利で、19 世紀中頃から後半の美濃産。６の紅皿は 19 世紀前半から中頃のもの。７は底部を手持ちヘラ削りする９世紀前半の須恵器坏で流れ込みとみられる。

時期

１の碗が明治時代のものであるため、19 世紀後半から 20 世紀初頭には埋没したと考えられる。



第 10 図　第１号溝状遺構実測図



第 11 図　第１号溝状遺構出土遺物実測図

第４表　第１号溝状遺構出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土遺構	種別器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量(g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調		備考
11-1 2-(SD01)-1	SD01	青磁 椀	口縁～ 胴部	(8.0) (2.1) －	10.4	ロクロ成形。外面縦方向に隆帯。クリム青磁椀。	φ1mm以下砂中量	良	外面 内面	オリーブ灰(10Y6/2) オリーブ灰(10Y6/2)	明治時代。瀬戸・美濃産
11-2 2-(SD01)-2	SD01	陶器 椀	口縁	(1.8) －	1.8	ロクロ成形。外面に色絵で文様。	φ1mm以下砂少量	良	外面 内面	灰黄(2.5Y7/2) 灰黄(2.5Y7/2)	近世。京焼系か
11-3 2-(SD01)-3	SD01	陶器 椀	胴部	－ (2.4) －	1.8	ロクロ成形。外面胴部上層から内面まで釉薬。	φ1mm以下砂少量	良	外面 内面	浅黄(2.5Y7/3) 浅黄(2.5Y8/3)	近世。瀬戸・美濃産
11-4 2-(SD01)-4	SD01	陶器 椀	胴部～ 底部	－ (3.2) (3.6)	10.7	筒型椀。ロクロ成形。削り出し高台。墨付を除いて黄灰色の灰釉。胴部に鉄絵で文様。	φ1mm以下砂少量	良	外面 内面	浅黄(2.5Y8/4) 浅黄(2.5Y8/4)	近世。京焼系か
11-5 2-(SD01)-5	SD01	陶器 徳利	胴部	－ (2.9) －	26.4	ロクロ成形。長石釉。	φ1mm以下砂中量	良	外面 内面	灰白(2.5Y7/1) 灰白(2.5Y7/1)	19世紀中頃か。尾張・瀬戸・美濃産。一升徳利
11-6 2-(SD01)-6	SD01	陶器 丸皿	口縁～ 底部	(4.0) 1.1 (1.0)	1.8	型打ち成形。外面縦方向に条痕。口縁外面から内面に灰白色の釉薬。	φ1mm以下砂少量	良	外面 内面	灰白(2.5Y7/1) 灰白(2.5Y8/1)	19世紀前半か。小小皿
11-7 2-(SD01)-7	SD01	須恵器 坏	底部	－ (6.4) (6.0)	12.7	ロクロ成形。底部手持ちヘラ削り。	φ1mm以上白色粒少量 φ1mm以下砂少量	良	外面 内面	褐灰(10YR6/1) 灰(5Y5/1)	9世紀前半。渡来品か

第２号溝状遺構―SD02（第 12 図）

位置：B － 1 グリッド。重複関係：重複関係なし。平面形・規模：調査区西側に位置する。北壁から延び、やや西側に屈曲しながら B － 1 グリッドの中央部分で終わる。残存部分の長さは 0.86m、溝の上端幅が 0.28 ～ 0.34m、下端幅が 0.2 ～ 0.26m である。確認面からの深さは 0.06m である。断面形状は薄い皿形である。主軸方位：N － 5 ° － W。覆土：1 箇所で覆土を観察した。1 層に分層し、自然堆積と考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは、遺物は出土していない。

時期

土層から近世から近代と考えられる。

2　土坑

第１号土坑―SK01（第 12 図）

位置：A・B － 2 ・ 3 グリッド。重複関係：なし。平面形・規模：楕円形を呈する。長軸 0.72m、短軸 0.56m、深さは 0.04m である。断面形状は、薄い皿形である。主軸方位：N － 80 ° － W。覆土：1 箇所で覆土を観察した。1 層に分層し、自然堆積と考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは、遺物は出土していない。

時期

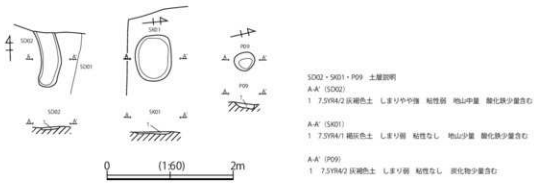
土層から、近世から近代と考えられる。

3　ピット（第 12 図）

本調査では、近世から近代のピットを 1 基検出した。ピットの計測値等は第 5 表に示した。

遺物

出土状況：本遺構からは、遺物は出土していない。



第 12 図　第 2 号溝状遺構・第 1 号土坑・P09 実測図

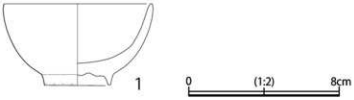
第 5 表　P09 集計表

遺構名	位置（グリッド）	平面形状	長軸長（m）	短軸長（m）	深さ（m）	出土遺物	備考
P09	B-1	円形	0.33	0.30	0.08	なし	

4　遺構外出土遺物

遺物（第 13 図、第 6 表、図版 2）

本調査では、試掘調査時に出土した遺物を含め遺構外から 9 点 110.6 g の遺物が出土した。土師器 4 点 11.1 g、陶磁器 3 点 53.1 g、瓦 1 点 41.5 g、その他 1 点 4.9g である。この内青磁碗 1 点を図示した。クロム青磁釉を掛ける高台内無釉の碗で、明治時代のものである。



第 13 図　遺構外出土遺物実測図

第 6 表　遺構外出土遺物観察表

種図番号 図版番号	出土遺構	種別器種	部位	法量(cm) 口径 最高 底径	重量(g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調		備考
13-1 2-<遺構外>-1	遺構外	青磁碗	口縁～底部	(8.0) 4.2 (3.5)	49.8	ロクロ成形、削り出し、高台、外面施釉、高台内無釉、クロム青磁釉、釉薬には砂が混ざる。	φ1mm以下砂中量	良	外面	オリーブ灰（10Y5/2）	明治時代
									内面	オリーブ灰（10Y4/2）	

第７表　遺物出土点数・重量一覧

遺構	土師器		須恵器		瓦		陶磁器		その他			合計	
	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	種別	点数	重量（g）
SD01	0	0.0	1	12.6	9	564.0	9	66.7	13	67.3		32	710.6
遺構外	0	0.0	0	0.0	1	41.5	3	53.1	0	0.0		4	94.6
試掘	4	11.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	4.9		5	16.0
合計	4	11.1	1	12.6	10	605.5	12	119.8	14	72.2		41	821.2

第４章　まとめ

今回の鍛冶谷・新田口12次では、弥生時代後期後半から古墳時代前期の柵跡１基、ピット４基、近世の溝状遺構２条、土坑１基、ピット１基を検出した。以下に各時代の様相について述べる。

１　弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構と遺物

本次の調査で検出した柵跡は、調査区南東側で確認したもので、鍛冶谷・新田口遺跡では初めて検出された遺構である。ピットは４基検出し、北西から南東を軸としている。調査地の東側隣接地で事業団が行った発掘調査では、調査地付近は北側に向かって落ち込む地形であり、微高地の縁となっていることが分かっている。縁の軸と今回検出した柵跡の軸が近いため、集落の境界に関係する可能性がある。

２　近世の遺構と遺物

本次の調査では溝状遺構２条、土坑１基、ピット１基を検出した。SD01とした溝状遺構は、西側に側溝が付き、北側に向かって傾斜している。明治時代のクロム青磁碗を検出したため、19世紀後半から20世紀初頭には埋没したものと思われる。近世の旧上戸田村の村絵図には、村内には多数の用水路・排水路があったことが分かっている。この用水路は、さいたま市の見沼代用水を引いたもので、調査地北側を流れる上戸田川は、近世では見沼代用水から荒川まで流れる用水路であった。本遺構は北側へ傾斜していることを考えると、上戸田川への排水路として機能していた可能性が高い。

３　まとめ

以上のように鍛冶谷・新田口12次では、弥生時代後期後半から古墳時代前期及び近世の遺構・遺物を検出し、調査範囲は狭いが微高地の縁にあたる本地点の土地利用形態について明らかにすることができた。

参考文献

西口正純
『鍛冶谷・新田口遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1986

第３部　前谷遺跡第１次発掘調査

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

昭和42年に弥生時代後期の遺物が堀割の間から出土し、「壕構（とうがまえ）」遺跡と命名された地点に近接した空閑地に、大型スーパーが建設されるとの情報が郷土史愛好家によって市教委に通報された。市教委は、早速担当者に命じて調査をさせたところ、建設は具体化され、戸田市の建設部に建築確認の申請がなされた。そこで、市教委は文化財保護委員会を開き、今後の措置について検討した結果、戸田市の埋蔵文化財の無秩序な破壊を防止するため、また建設予定地が「壕構」遺跡の一部にかかるため、早急に発掘調査を行わなければならないとの結論に達し、記録保存の措置をとることになった。なお、遺跡の名を前谷遺跡と命名した。

第２節　発掘調査と整理作業の経過

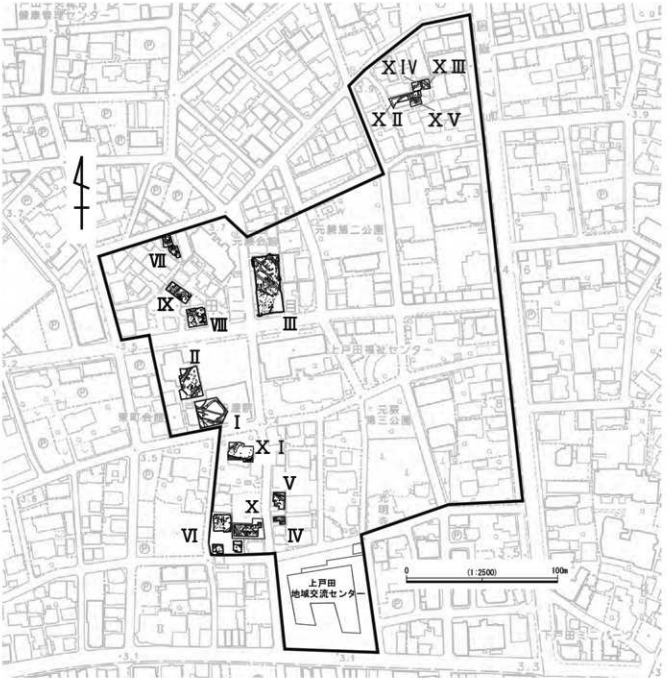
前谷１次は、市教委の伊藤が担当となり、國學院大学学生、東洋大学学生、地元有志、また県文化財保護課の協力を得て、昭和47年８月23日から９月６日まで実施した。調査面積は、全体図面から計測すると約457㎡である。発掘調査後に整理作業を行い、戸田市文化財調査報告ⅩⅢ『前谷遺跡発掘調査概要』（以下『調査概要』という）として昭和53年３月31日に刊行した。

令和４年度に前谷１次の出土遺物再整理業務を行ったところ、未整理の資料を多数確認し、『調査概要』に掲載されていない遺物もあったため、再整理を行うなかで、報告書作成作業を併せて行うことにした。報告書作成は令和４年７月１日から令和６年１月31日まで生涯学習課埋蔵文化財等整理室及び戸田市立郷土博物館博物館事務室にて実施した。

未整理の出土品は、注記作業を行い、併せて接合作業も行った。その後、『調査概要』に掲載されていない出土品の中で報告書に掲載するものを抽出・実測図作成・拓影採取を行った。採取した拓影はスキャナにてコンピュータに取り込んだ後、Adobe Photoshopにて修正し、デジタルデータ化した。『調査概要』に掲載されている出土遺物実測図、遺構平面図、エレベーション図等の図面は、『調査概要』をスキャナで取り込み、Adobe Illustratorにてデジタルトレースを行い、一部の遺物は拓影採取を行った。

遺物写真は、NikonD610、105㎜単焦点マクロレンズを使用してRAW（NEF）形式で撮影し、Digital Photo Professionalにより現像処理、ホワイトバランス等の補正を行い、tiff形式・jpeg形式ファイルを作成した。版下は、Adobe Illustrator、Adobe InDesignにて作成し、PDF形式ファイルにて入稿した。

なお、『調査概要』には掲載されているが、再整理で確認できなかった遺物は今回の報告書には図示せず、重量・数量にも計測していない。



Ⅰ　第１次調査 (1972)　：戸田市教育委員会調査（伊藤 1978）

Ⅱ　第２次調査 (2007)　：戸田市教育委員会調査（岩井 2014）

Ⅲ　第３次調査 (2011)　：財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査（永熊 2015）

Ⅳ　第４次調査 (2011 ～ 2012)：財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査（岩井 2015）

Ⅴ　第５次調査 (2016)　：戸田市教育委員会調査（長澤 2018）

Ⅵ　第６次調査 (2017)　：戸田市教育委員会調査（西田 2019）

Ⅶ　第７次調査 (2019)　：戸田市教育委員会調査（今井・辻2020）

Ⅷ　第８次調査 (2020)　：戸田市教育委員会調査（今井・諸星2020）

Ⅸ　第９次調査 (2021)　：戸田市教育委員会調査（今井・内田2021）

Ⅹ　第10次調査 (2021)　：戸田市教育委員会調査（今井・黒済・林2021）

ⅩⅠ　第11次調査 (2021)　：戸田市教育委員会調査（今井 2022）

ⅩⅡ　第12次調査 (2022)　：戸田市教育委員会調査（今井・西井・田中2023）

ⅩⅢ　第13次調査 (2023)　：戸田市教育委員会調査（未刊行）

ⅩⅣ　第14次調査 (2023)　：戸田市教育委員会調査（未刊行）

ⅩⅤ　第15次調査 (2023)　：戸田市教育委員会調査（未刊行）

第 14 図　前谷遺跡調査区位置図

第２章　検出された遺構と遺物

第１節　弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構と遺物

１　周溝状遺構

第１号周溝状遺構－ SX01（第 15 図、図版３－１・２）

位置：調査区中央で検出。重複関係：SD01、SD02、SD04 に切られ、SD06 は平面図では切っているが、出土遺物から SD06 の方が新しいと考えられる。平面形・規模：コーナー部分は隅丸を呈し、南西側に開口部を持つ。平面図上では北溝 11.1m、東溝 10.8m、南溝 11.6m、開口部は 4.1m、全体の長さは北西から南西で 12.9m、北東から南西 13.6m。方台部は北西から南西で 10m、北東から南西 11.8m である。上端幅 0.9 ～ 1.5m、下端幅 0.7 ～ 1.3m。断面形状は逆台形である。確認面からの深さは１m であるが、各コーナー部分は高くなっており、溝中の起伏は激しい。一部の掘り込みは溝中土坑の可能性がある。主軸方位：N － 55° － E。覆土：調査時の土層断面図がないため不明。『戸田市史資料編１』では、最下層にロームブロックを含む黄褐色土、その上に黒褐色土、さらに焼土を含む黒褐色土としている。

遺物（第 16・17 図、第８・９表、図版３－２、図版４・５）

出土状況：本遺構からは、土師器 300 点 8692.9g、須恵器 10 点 221.4g、陶器６点 98.9 g、近世土器１点 8.5g、石製品２点 206.6g、焼成粘土５点 209.8g、瓦１点 91.9g の遺物が出土した。『調査概要』で掲載されている遺物以外に接合できたものを含め 32 点を図示した。この内１の壺は、『調査概要』（図６－１）の壺に該当し、再整理により全体を復元した。また、22 の甕は『調査概要』（図６－ 13）の甕に該当し、再整理で口縁部から脚部上部まで復元した。

壺は複合口縁のものを中心に多数出土し、胴部は下膨れ状のものと球胴化するものが出土している。１の壺は、胴部最大径が下部につく下膨れ状の壺で複合口縁部には４本単位の棒状浮文がつく。15 は底部中央部分を欠損している。欠損部の打刻痕は底部内面と外面にそれぞれ確認できるため、意図的に穿孔しているかは判断できないが、底部穿孔壺の可能性がある。21 の高坏は、内外面を赤彩し、口縁部を強く外反させるもので、長野県の箱清水式土器の影響を受けたものと考えられる。

時期

壺は胴部が下膨れ状のもと球胴化するものが出土し、胴部に文様帯を配置する。また、甕は口唇部にキザミをもち、頸部が緩やかに立ち上がるものが主体であるため、弥生時代後期後半から新しくとも古墳時代前期初頭と考えられる。

第２号周溝状遺構－ SX02（第 15 図、図版３－３・４）

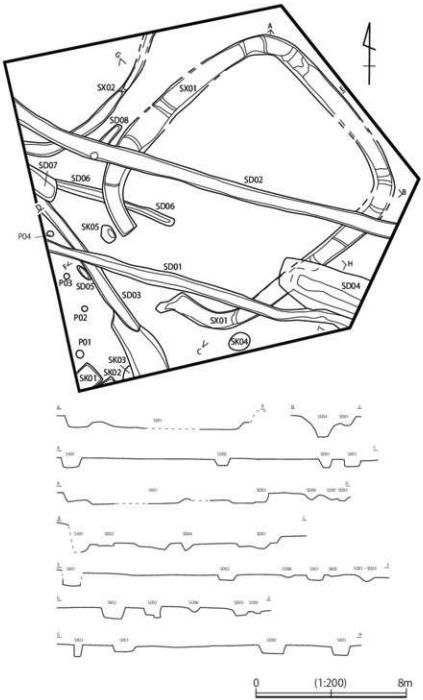
位置：調査区北西隅で検出。重複関係：SD02 に切られる。平面形・規模：西壁から弧を描き北壁に至る。平面の形状は円形もしくは隅丸方形と考えられる。検出された溝全体の長さは約 9.5m。上端幅 0.3 ～ 0.7m、下端幅 0.2 ～ 0.5m。断面形状は逆台形である。確認面からの深さは１m である。主軸方位：不明。覆土：調査時の土層断面図がないため不明。『戸田市史資料編１』では、最下層に粘性の黒褐色土、その上に砂層、黄褐色土の粒子を多量に含む黒褐色土としている。

遺物（第 18 図、第 10 表、図版３－４、図版５）

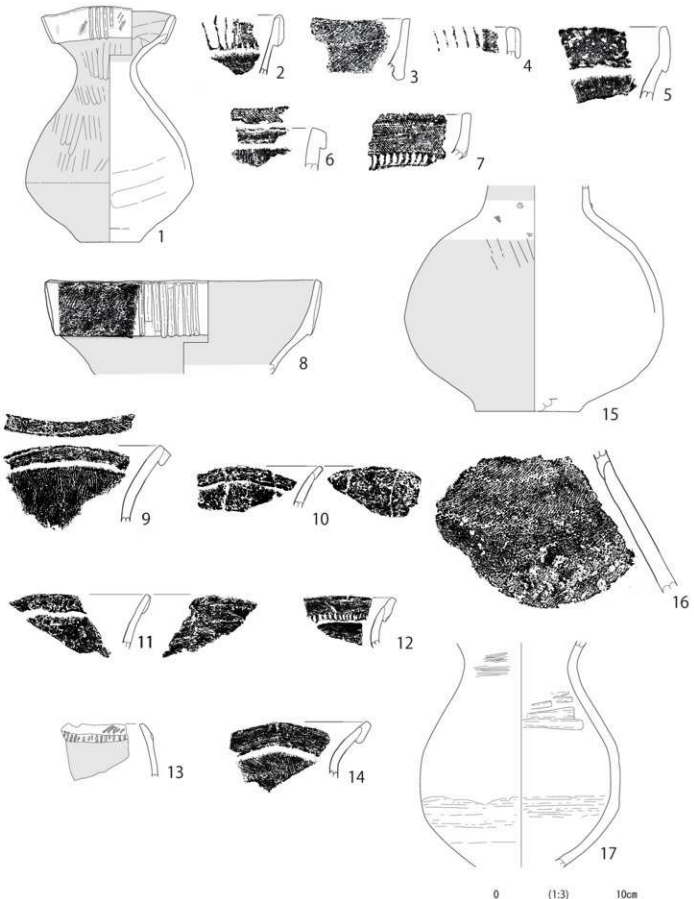
出土状況：本遺構からは、土師器 43 点 1872.5g、須恵器 13 点 303.6g、板碑 1 点 253.3g の遺物が出土した。『調査概要』では、注記が「マ５溝」となっている遺物を、「第２号方形周溝墓」出土の遺物として掲載しているため、本報告書でも「マ５溝」の遺物を SX02 出土遺物としている。『調査概要』に掲載されている土師器 4 点を改めて図示した。１の壺は口縁部が厚い複合口縁状の広口壺で、内外面とも赤彩している。３の壺は、胴部が球胴化し、胴部が無文である。４の高坏は、脚部が長大で、脚部外面及び坏部内面を赤彩しいている。

時期

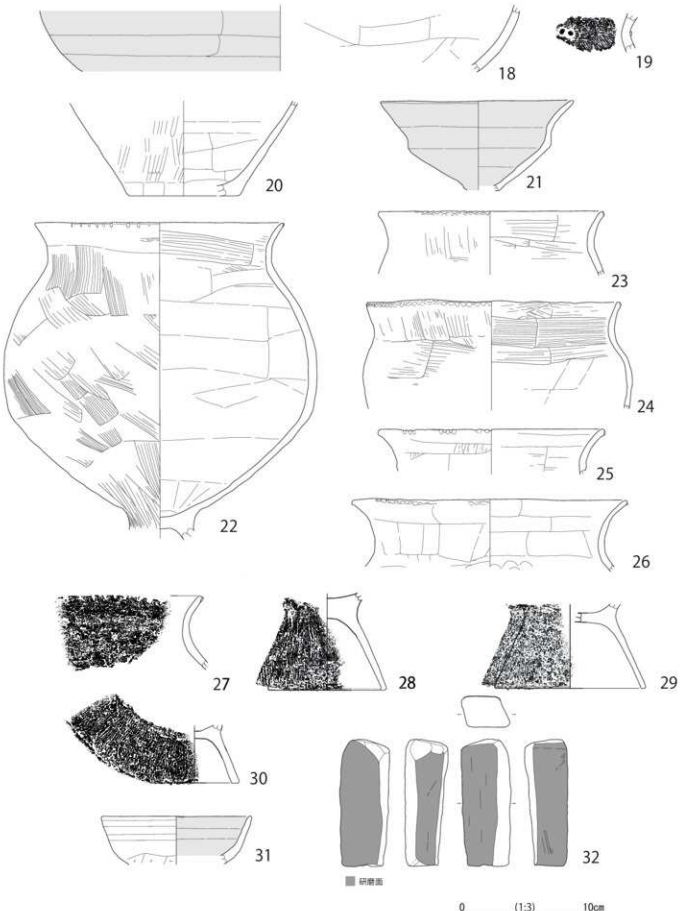
胴部が球胴化し、文様が施文されていない壺が出土しているため、古墳時代前期前半と考えられる。



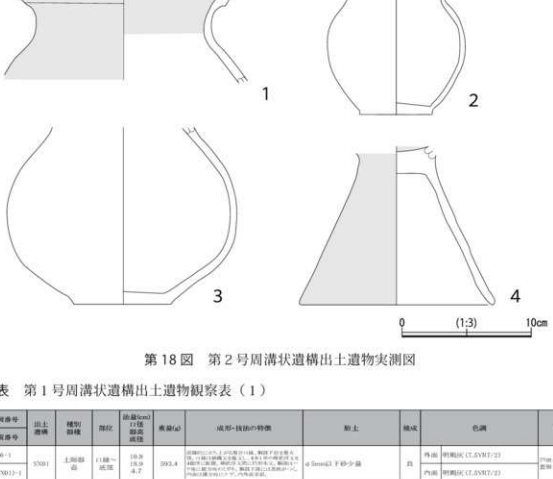
第 15 図　前谷１次全体図・エレベーション図



第 16 図　第 1 号周溝状遺構出土遺物実測図（1）



第 17 図　第 1 号周溝状遺構出土遺物実測図（2）



第18図　第２号周溝状遺構出土遺物実測図

第８表　第１号周溝状遺構出土遺物観察表（１）

図版番号 図版番号	出土遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量(g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調		備考
16-1 4-(SX01)-1	SX01	土師器 甕	口縁～底部	19.8 18.9 4.7	592.4	底部の辺から上が広がる。口縁は、頸部下部を横ヘラ削り、胴部は縦ヘラ削り。頸部下部から胴部にかけて、縦ハケ調整。頸部上部に、ヨコナデ。口縁は、内面に横ヘラ削りの痕跡。胴部下部には指跡がある。内面は横ヘラミガキ。胴部下部には指跡がある。内面は横ヘラミガキ。内面赤彩。	◎5mm以下砂少量	良	外面 内面	明褐灰(7.5YR7/2) 明褐灰(7.5YR7/2)	宗像市文化財調査報告X集:6-1
16-2 4-(SX01)-2	SX01	土師器 甕	口縁	－ (4.2) －	16.4	底部の辺から上が広がる。口縁は、口縁部上部に縦ヘラ削り。内面は、横ヘラミガキ。内面赤彩。	◎2mm以下砂少量 ◎5mm以下礫少量	良	外面 内面	にぶい黄(7.5YR6/3) 灰黄(7.5YR6/2)	宗像市文化財調査報告X集:6-2
16-3 4-(SX01)-3	SX01	土師器 甕	口縁	－ (5.1) －	36.0	底部の辺から上が広がる。口縁は、口縁部上部に縦ヘラ削り。内面は、横ヘラミガキ。内面赤彩。	◎2mm以下砂少量 ◎1mm以下白色粒子少量 ◎5mm以下ジャモット多量	良	外面 内面	灰黄褐(10YR4/2) 褐灰(10YR4/1)	宗像市文化財調査報告X集:6-3
16-4 4-(SX01)-4	SX01	土師器 甕	口縁	－ (2.3) －	15.9	幅の狭い複合口縁。縦縄文を施文し、3本の線状沒文を配置。口縁部直線的。内面横ナデ。	◎2mm以下砂少量 ◎5mm以下礫少量 ◎6mm以下ジャモット少量	良	外面 内面	にぶい黄橙(10YR6/3) 褐(10YR4/4)	宗像市文化財調査報告X集:6-4
16-5 4-(SX01)-5	SX01	土師器 甕	口縁	－ (3.5) －	33.2	底部の辺から上が広がる。複合口縁。口縁部は縦縄文を回転台に施文。外面縦ミガキ。内面横ナデ。赤彩。	◎1mm以下砂少量	良	外面 内面	にぶい橙(7.5YR6/4) にぶい橙(7.5YR6/4)	宗像市文化財調査報告X集:6-5
16-6 4-(SX01)-6	SX01	土師器 甕	口縁	－ (3.1) －	21.5	折返し口縁。口唇部縦文で面取り。外面横ハケ、縦ハケ。内面横ナデ。	◎1mm以下砂少量 ◎5mm以下ジャモット少量	良	外面 内面	にぶい黄橙(10YR7/3) 黒褐(10YR2/2)	宗像市文化財調査報告X集:6-7
16-7 4-(SX01)-7	SX01	土師器 甕	口縁	－ (6.4) －	27.1	底部の辺から上が広がる。複合口縁。口縁部は回転縦文を施文。口唇部縦文で面取り。口唇下段にヘラミガキ。内面横ナデ。	◎1mm以下砂中量	良	外面 内面	にぶい黄橙(10YR7/3) 浅黄橙(7.5YR8/3)	宗像市文化財調査報告X集:6-8
16-8 4-(SX01)-8	SX01	土師器 甕	口縁～胴部	(22.2) (7.5) －	151.1	底部の辺から上が広がる。複合口縁。縦縄文を施文し、6本1組の線状沒文を配置。胴部はナデ。口縁部内面はナデ。胴部外面、口縁部内面赤彩。	◎1mm以下砂少量 ◎2mm以上ジャモット少量	やや良	外面 内面	にぶい橙(7.5YR7/3) にぶい橙(7.5YR7/3)	
16-9 4-(SX01)-9	SX01	土師器 甕	口縁～胴部	－ (6.1) －	80.5	やや内傾して立ち上がり折返し口縁。口唇部は縦文で面取。口縁部外面はハケ調整。胴部はハケ調整後にナデ。	◎1mm以下砂少量 ◎5mm以上ジャモット多量	良	外面 内面	にぶい橙(7.5YR7/4) 黒(7.5YR2/1)	
16-10 4-(SX01)-10	SX01	土師器 甕	口縁	－ (3.3) －	16.7	短い複合口縁状の口縁部。外面ハケ。内面ナデ。	◎1mm以下砂少量 ◎2mm以上礫多量	やや不良	外面 内面	にぶい橙(7.5YR7/4) 浅黄橙(7.5YR8/4)	
16-11 4-(SX01)-11	SX01	土師器 甕	口縁	－ (4.3) －	22.9	胴部から直線的に立ち上がり、折返し口縁。口唇部ハケで面取り。外面ナデ。内面横ナデ。内外面赤彩。	◎1mm以下砂少量 ◎1mm以下白色粒子少量 ◎2mm以上ジャモット少量	やや不良	外面 内面	にぶい褐(7.5YR6/3) にぶい褐(7.5YR6/3)	
16-12 4-(SX01)-12	SX01	土師器 甕	口縁	－ (4.0) －	21.1	やや内傾し立ち上がる。複合口縁。口唇部はハケで面取り。外面は横ハケ。口縁部下端にケズリ。	◎1mm以下砂少量	良	外面 内面	にぶい褐(7.5YR6/3) にぶい褐(7.5YR6/3)	
16-13 4-(SX01)-13	SX01	土師器 甕	口縁	－ (4.2) －	17.4	底部の辺から上が広がる。口縁。口縁部上端に縦縄文。口縁部下に突帯。突帯上は一方向に上向きヘラ。突帯下は面取。	◎1mm以下砂少量 ◎2mm以上ジャモット多量	良	外面 内面	灰褐(7.5YR6/2) にぶい橙(5.5YR6/3)	
16-14 4-(SX01)-14	SX01	土師器 甕	口縁	－ (4.5) －	44.2	やや外反し立ち上がる。複合口縁。外面・内面ハケ調整。	◎1mm以下砂少量 ◎2mm以下礫少量 ◎2mm以上ジャモット多量	良	外面 内面	褐灰(10YR4/1) にぶい黄橙(10YR6/3)	
16-15 4-(SX01)-15	SX01	土師器 甕	胴部～底部	(19.1) 8.2	1296.1	胴部は膨らむ。底部は丸平。ハケ調整。胴部下部～胴部・胴部上半胴部下部は、縦ハケ調整。胴部上半胴部は、横ハケ調整。胴部下半～胴部上半は、縦ハケ調整。胴部下半～胴部上半は、縦ハケ調整。底部中央部は、ヨコハケ。外面・内面に胴部の痕跡がある。	◎1mm以下砂少量 ◎5mm以下礫少量 ◎2mm以上ジャモット少量	やや良	外面 内面	灰黄褐(10YR6/2) 灰黄褐(10YR6/2)	

第９表　第１号周溝状遺構出土遺物観察表（２）

図版番号 図版番号	出土遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量(g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調		備考
16-16 4-(SX01)-16	SX01	土師器 壺	胴部	－ (11.1) －	322.4	直線的に立ち上がる胴部。細縦支を2段施文し、上段は半史上下揃に、下段は上端に小字的結節文で区画、文様間はミがき後に赤彩。	φ1mm以下砂少量 φ1mm以白色粒子少量 φ3mm以上シャモット少量	良	外面 内面	にぶい黄橙(10YR7/3) 灰黄褐(10YR6/2)	
16-17 4-(SX01)-17	SX01	土師器 壺	胴部	－ (15.0) －	384.6	胴部最大径を下部に持ち、器面は緩やかに膨曲。外面・内面ともに縦・横ハケ。	φ2mm以下砂中量	良	外面 内面	にぶい黄橙(10YR7/3) にぶい黄橙(10YR7/3)	戸田市文化財調査報告第4集
17-18 4-(SX01)-18	SX01	土師器 壺	胴部	－ (4.8) －	110.1	平底の底部から直線的に立ち上がる。外面は横ナデ後に赤彩。内面は横ナデ。下端部分は縦ナデ。	φ1mm以下砂少量 φ3mm以上シャモット少量	良	外面 内面	にぶい黄橙(10YR6/3) にぶい黄橙(10YR6/3)	
17-19 5-(SX01)-19	SX01	土師器 壺	胴部	－ (3.3) －	15.8	やや内傾し立ち上がる胴部。細縦支を施文し、調文単上段に円形浮文を2つ配置、内面はナデ。外面赤彩。	φ1mm以下砂少量 φ3mm以上シャモット松中量	良	外面 内面	にぶい橙(7.5YR6/4) にぶい橙(7.5YR6/4)	戸田市文化財調査報告第4集
17-20 5-(SX01)-20	SX01	土師器 壺	胴部～底部	－ (7.6) (8.6)	80.1	平底の底部から直線的に立ち上がる。外面縦ミがき、底部付近は縦ナデ。内面横ナデ。	φ1mm以下砂少量 φ3mm以下雲母少量 φ6mm以上シャモット松中量	良	外面 内面	褐灰(10YR5/1) 褐灰(10YR5/1)	
17-21 5-(SX01)-21	SX01	土師器 高杯	口縁～ 胴部	15.4 (7.2) －	203.4	外傾底部から直線的に立ち上がり、胴部からは緩うえ大きく外反する。外面・内面横ナデ。外面下部を縦ミがき。内外面赤彩。外面に黒斑。	φ1mm以下砂中量	やや良	外面 内面	にぶい橙(7.5YR7/4) にぶい橙(7.5YR7/4)	胴部表面剥ぎ
17-22 5-(SX01)-22	SX01	土師器 台付壺	口縁～ 胴部	－ (19.8) (24.5)	924.5	胴部緩やかな膨曲。胴部球状。口管部ネザ。外面は縦部横ナデ。胴部縦ハケ。内面は縦部横ハケ。胴部内面横ナデ。底付近縦ナデ。	φ1mm以下砂少量 φ3mm以上シャモット少量	良	外面 内面	橙(7.5YR6/3) 灰褐(7.5YR6/2)	戸田市文化財調査報告第4集
17-23 5-(SX01)-23	SX01	土師器 壺	口縁～ 胴部	－ (18.0) (3.1) －	28.0	胴部緩やかな膨曲。口管部波状文圧。外面は縦部縦ハケ。口縁部内面横ハケ。	φ1mm以下砂少量 φ3mm以下雲母少量 φ3mm以上シャモット少量	良	外面 内面	黒褐(7.5YR3/1) 灰褐(7.5YR6/2)	
17-24 5-(SX01)-24	SX01	土師器 壺	口縁～ 胴部	－ 20.2 (8.5) －	205.5	胴部緩やかな膨曲。口管部波状文圧。外面は縦部縦ハケ。胴部ホハケ。口縁部内面横ハケ。胴部内面縦ナデ。	φ1mm以下砂少量 φ3mm以下雲母少量 φ3mm以上シャモット中量	良	外面 内面	灰褐(7.5YR5/2) 灰褐(7.5YR6/2)	
17-25 5-(SX01)-25	SX01	土師器 壺	口縁～ 胴部	－ (18.0) (3.6) －	30.6	胴部緩やかな膨曲。口管部波状文圧。外面は縦部縦ハケ後に横ナデ。口縁部内面横ハケ後に横ナデ。	φ1mm以下砂少量	良	外面 内面	灰褐(7.5YR6/2) 明褐灰(7.5YR7/2)	
17-26 5-(SX01)-26	SX01	土師器 壺	口縁～ 胴部	－ (22.0) (5.3) －	76.2	胴部緩やかな膨曲。口管部波状文圧。外面は縦部横ナデ。胴部以下は縦ナデ。口縁部内面横ナデ。胴部内面に指頭圧痕が残る。	φ1mm以下砂少量	良	外面 内面	灰褐(7.5YR6/2) 灰褐(7.5YR5/2)	
17-27 5-(SX01)-27	SX01	土師器 壺	口縁	－ (5.9) －	70.6	胴部緩やかな膨曲。口管部ネザ。外面は縦部縦ナデ。口縁部内面横ナデ。	φ1mm以上白色粒少量 φ3mm以下砂少量	良	外面 内面	灰褐(7.5YR6/2) にぶい橙(7.5YR7/4)	
17-28 5-(SX01)-28	SX01	土師器 台付壺	脚部～ 底部	－ (7.7) (9.4) －	189.5	ハの字状に開く脚部。外面縦ハケ。内面ナデ。	φ1mm以下砂少量 φ3mm以上シャモット少量	良	外面 内面	にぶい橙(7.5YR5/3) にぶい橙(7.5YR6/4)	
17-29 5-(SX01)-29	SX01	土師器 台付壺	脚部～ 底部	－ (6.7) (12.0) －	81.2	ハの字状に開く脚部。外面縦ハケ。内面横ハケ。ナデ。	φ1mm以下砂少量 φ3mm以上シャモット中量	良	外面 内面	にぶい赤橙(2.5YR3/4) にぶい橙(5YR6/3)	
17-30 5-(SX01)-30	SX01	土師器 台付壺	脚部～ 底部	－ (4.6) 6.9 －	89.4	短くハの字状に開く脚部。外面縦ハケ。内面ハケ。	φ1mm以下砂少量 φ3mm以上シャモット中量	良	外面 内面	にぶい橙(2.5YR3/4) にぶい橙(5YR6/3)	
17-31 5-(SX01)-31	SX01	土師器 坏	口縁～ 胴部	－ (12.0) (3.8) －	16.4	胴部で屈曲し口縁部は直線的に立ち上がる。口縁部外面ハケ後ハケ。内面は横ナデによる調。外面胴部はケズリ。内面赤彩。	φ1mm以下砂少量	良	外面 内面	にぶい黄橙(10YR7/2) 褐灰(10YR6/1)	古墳時代後期
17-32 5-(SX01)-32	SX01	石製品 紡石	－	－ 2.8 －	163.2	扁平石製。面全域石か。長方形を呈し、4面に研磨跡を確認できる。	－	－	外面 内面	にぶい黄橙(10YR6/4)	

第10表　第２号周溝状遺構出土遺物観察表

図版番号 図版番号	出土遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量(g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調		備考
18-1 5-(SX02)-1	SX02	土師器 壺	口縁～ 胴部	(8.0) (7.5) －	86.8	胴部から大きく内傾して立ち上がる。複合口縁。外面は縦部横ハケ。外面胴部縦ミがき。内面横ナデ。内外面赤彩。	φ1mm以下砂少量 φ3mm以上シャモット中量	良	外面 内面	にぶい橙(7.5YR7/4) にぶい橙(7.5YR6/3)	戸田市文化財調査報告第3集:7-1
18-2 5-(SX02)-2	SX02	土師器 小壺	胴部～ 底部	－ (9.7) 5.5 －	195.5	平底の底部から内傾して立ち上がる。胴部上位を最大径。内外面ナデ。	φ1mm以下砂少量 φ3mm以上シャモット少量	良	外面 内面	にぶい橙(7.5YR7/3) 灰褐(7.5YR4/2)	戸田市文化財調査報告第3集:7-2
18-3 5-(SX02)-3	SX02	土師器 壺	胴部～ 底部	－ (13.6) 7.1 －	636.4	平底の底部からやや内傾して立ち上がる。胴部中央を最大径。外面・内面横ナデ。	φ1mm以下砂少量 φ3mm以上シャモット中量	良	外面 内面	にぶい橙(7.5YR6/4) にぶい橙(7.5YR6/4)	戸田市文化財調査報告第3集:7-3
18-4 5-(SX02)-4	SX02	土師器 高杯	脚部～ 底部	－ (12.1) 13.5 －	500.5	「ハの字状に開く脚部。脚部外面縦ミがき。内面ハケ後横ナデ。坏部・脚部内面赤彩。	φ1mm以下砂少量 φ3mm以上シャモット中量	良	外面 内面	明褐灰(7.5YR7/1) にぶい橙(7.5YR6/3)	戸田市文化財調査報告第3集:7-4

2　土坑

第３号土坑―SK03（図版３－８）

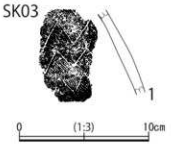
位置：調査区南壁際で検出。重複関係：『調査概要』では第３溝について、「第３溝に切られる」と記載しているが、「第３土坑」の誤りであるなら SD03 を切っていることになる。平面形・規模：『調査概要』では円形を呈し、長軸 1.3m、深さ 1.1m とするが、平面図上では明示されていないため不明。南側は調査区外に延びる。写真では半円の形状を呈しているため井戸跡の可能性がある。覆土：調査時の土層断面図がないため不明。『調査概要』では、黒色土と汚れたロームブロックが混ざって堆積していると記載されている。

遺物（第 19 図、第 11 表、図版６）

出土状況：本遺構からは、土師器１点 36.6g が出土し、図示した。

時期

出土遺物から、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭とみられるが、SD03 を切っているのであれば平安時代の可能性もある。



第 19 図　第３号土坑出土遺物実測図

第 11 表　第３号土坑出土遺物観察表

図版番号 図版番号	出土遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量(g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調		備考
19-1	SK03	土師器 甕	胴部	－ (2.1) －	36.6	底部のこぶ上げ痕。弱代縄文及び擬擬状文を施文し、擬擬状文内部を横消す。横消し、無文部を帯状。	φ 1mm以下砂中量	良	外面	にぶい橙(7.5YR6/4)	内面の文化財調査報告X第 10
6-(SK03)2-1									内面	灰褐(7.5YR5/2)	

第２節　平安時代以降の遺構と遺物

1　溝状遺構

第１号溝状遺構―SD01（第 20 図、図版３－５）

位置：調査区南側で検出。重複関係：SX01、SD03、SD04 を切る。平面形・規模：調査区東壁から北西に伸び西壁に至る。SD02 と並行している。長さ 16.5m、上端幅が 0.4 ～ 0.8m、下端幅 0.3 ～ 0.5m。確認面からの深さは 0.8m である。断面形状は、逆台形である。主軸方位：N － 75°－ W。覆土：調査時の土層断面図がないため不明。『調査概要』では赤色粒子を含んだ茶褐色土が堆積していると記載されている。

遺物（第 21 図、第 12 表、図版６）

出土状況：本遺構からは、土師器 57 点 411.6 g 、須恵器 15 点 265.1g、陶器１点 40.0g が出土した。この内３点を図示した。

時期

出土遺物から、平安時代前期の９世紀前半から中頃と考えられる。

第２号溝状遺構―SD02（第 20 図、図版３－６）

位置：調査区中央で検出。重複関係：SX01、SX02、SD08 を切る。平面形・規模：調査区東壁から北西に伸び、北西側で北に緩く屈曲し西壁に至る。長さ 21m、上端幅が 0.7 ～ 1.8m、下端幅 0.3 ～ 0.5m。確認面からの深さは 0.5m である。断面形状は、逆台形である。主軸方位：N － 70° － W。覆土：調査時の土層断面図がないため不明。『調査概要』では、赤色粒子を含んだ茶褐色土が堆積していると記載されている。

遺物（第 21 図、第 12 表、図版６）

出土状況：本遺構からは、土師器 170 点 1658.2 g、ロクロ土師器３点 29.1g、須恵器 29 点 406.5g、陶器１点 48.0g、土器２点 25.2g、土製品１点 15.2g が出土した。この内２点を図示した。２の土製品は下部が欠けており、残存部はナデ調整で全体が赤彩されている。形象埴輪の一部である可能性がある。同様の遺物は前谷 11 次でも出土している。

時期

今回図示した遺物は古墳時代のものであるが、遺物の多くは平安時代のもので、第１号溝とも並行していることから、平安時代と考えられる。

第３号溝状遺構―SD03（第 22 図、図版３－５）

位置：調査区西側で検出。重複関係：SD01、SD07 に切られる。『調査概要』では「第３溝」に切られるとあるが、「第３土坑」の間違いか。平面形・規模：調査区西壁から南西に伸び、途中で幅が広がり南壁に至る。長さ９m、上端幅が 0.4 ～ 0.7m、下端幅 0.3 ～ 0.4m。確認面からの深さは 0.8m である。出土する遺物が９世紀から 10 世紀の時期にわたるため、２基以上の遺構があった可能性が高い。断面形状は、半円形である。主軸方位：N － 40° － W。覆土：調査時の土層断面図がないため不明。『調査概要』では、黒灰色土が堆積していると記載されている。

遺物（第 23 ～ 25 図、第 13 ～ 15 表、図版６～８）

出土状況：本遺構からは、土師器 1191 点 8745.1 g、ロクロ土師器 49 点 1605.3 g、須恵器 204 点 5185.0g、灰釉陶器５点 500.7g、土器７点 76.1g、瓦１点 26.6g、焼成粘土８点 149.0.g、土製品１点 13.6g が出土した。この内 63 点を図示した。

時期

９世紀初頭から 10 世紀中頃までの遺物が多量に出土しているため、２基以上の遺構が切り合っていた可能性がある。遺構は、10 世紀には埋没したと考えられる。

第４号溝状遺構―SD04（第 22 図、図版３－７）

位置：調査区南東隅で検出。重複関係：SD01 に切られ、SX01 を切る。平面形・規模：調査区東壁から北西に伸び終わる。長さ 4.5m、上端幅が 1.5 ～ 2.4m、下端幅 0.4 ～ 0.6m。確認面からの深さは 1.5m である。断面形状は、逆台形である。主軸方位：N － 60° － W。覆土：調査時の土層断面図がないため不明。

遺物（第 26 図、第 16 表、図版８）

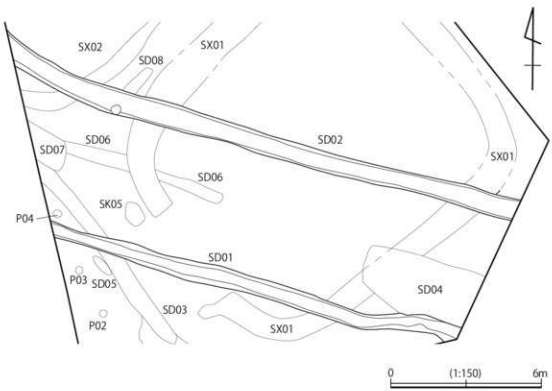
出土状況：本遺構からは、土師器 24 点 242.8 g、ロクロ土師器２点 17.0 g、須恵器 43 点 1498.0g、陶器２点 18.5g、土製品１点 271.6.g、その他２点 435.3g が出土した。この内２点を図示した。

時期

『調査概要』では城館の堀跡としているが、出土遺物は、平安時代の土師器・須恵器が中心であるため、平安時代の遺構と考えられる。

第５号溝状遺構―SD05（第 22 図）

位置：調査区西側で検出、SD03 と隣接している。重複関係：SD03 と切り合っている可能性がある。平面形・規模：長さ１m、上端幅 0.4m、下端幅 0.3m。確認面からの深さは不明。断面形状も不明。主軸方位：N － 40° － W。覆土：調査時の土層断面図がないため不明。



第 20 図　第１・２号溝状遺構実測図

第 21 図　第１・２号溝状遺構出土遺物実測図

第 12 表　第 1・2 号溝状遺構出土遺物観察表

掲図番号 図版番号	出土遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量(g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調		備考
21-(SD01-1) 6-(SD01)-1	SD01	土師器 甕	口縁～ 胴部	- (7.5)	69.3	胴部から直線的に立ち上がり、口縁は大きく外反する。口縁部内面横ナデ、胴部縦ケズリ、内面横ナデ。	◇1mm以下砂少量 ◇1mm雲母少量	良	外面	浅黄橙(10YR8/3)	
									内面	浅黄橙(10YR8/3)	
21-(SD01-2) 6-(SD01)-2	SD01	須恵器 坏	口縁～ 底部	(14.4) 4.4 6.3	126.4	石ロクロ成形、底部切断糸切り後に一ケ所ヘラ、底部の一部が切り離っているため横く。	◇2mm以下砂少量 ◇1mm以下白色粒子少量	良	外面	灰(5Y5/1)	黒色子焼か。
									内面	灰(5Y5/1)	
21-(SD01-3) 6-(SD01)-3	SD01	須恵器 坏	底部	(1.7) 6.2	54.5	石ロクロ成形、底部切断糸切り後に高台貼付け。	◇2mm以下砂少量 ◇1mm以下雲母少量	やや 不良	外面	灰白(5Y7/1)	
									内面	灰白(5Y7/1)	
21-(SD02)-1 6-(SD02)-1	SD02	土師器 甕	胴部～ 底部	- (35.9) (7.0)	268.2	平底からやや内傾して立ち上がる。外面横ナデ、内面横ハケ。	◇1mm以下砂少量 ◇3mm以上シャモット中量	良	外面	にぶい橙(7.5YR7/4)	古墳時代前期
									内面	浅黄橙(10YR8/4)	
21-(SD02)-2 6-(SD02)-2	SD02	土製品 形象埴輪		(1.4)	15.9	下部を欠損、全体赤彩、成形はナデ。	◇1mm以下砂少量 ◇1mm白色粒子微量	良	外面	にぶい橙(7.5YR7/4)	形象埴輪の一部か。
									内面	-	

遺物

本遺構からは遺物は出土していない。「マ 5 溝」と注記があるものは、『調査概要』と同じく第 2 号周溝状遺構として計測している。再整理では「マ 9 溝」と注記のある遺物を複数確認したため、発掘調査時は第 9 溝としていた可能性がある。

時期

覆土・遺物ともに情報がないため時期は不明である。

第 6 号溝状遺構―SD06（第 22 図）

位置：調査区西側で検出。重複関係：SD07 に切られ、SX01 を切る。平面形・規模：調査区西側から南東に伸び、SX01 方台部内で終わる。長さ 6.5m、上端幅 0.3 ～ 0.6m、下端幅 0.1 ～ 0.3m。確認面からの深さは 0.5m である。断面形状は、半円形である。主軸方位:N － 70°－ W。覆土：調査時の土層断面図がないため不明。

遺物

出土状況：土師器 12 点 94.2 g、須恵器 7 点 74.3g、その他 1 点 3.7g が出土した。破片資料が多く図示できなかった。

時期

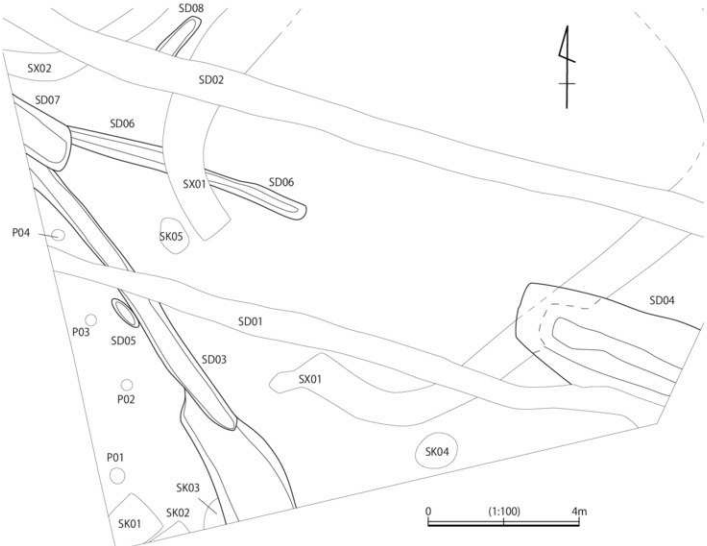
出土遺物から、平安時代と考えられる。

第 7 号溝状遺構―SD07（第 22 図）

位置：調査区西壁際で検出。重複関係：SD03、SD06 を切る。平面形・規模：調査区西壁から南東に伸びる。『調査概要』では SD04 に相対する堀の可能性を指摘している。長さ 1.6m、上端幅が 1.2m、下端幅 0.7m。確認面からの深さは 0.5m である。断面形状は、逆台形である。主軸方位：N － 50°－ W。覆土：調査時の土層断面図がないため不明。

遺物（第 26 図、第 16 表、図版 8）

出土状況：本遺構からは、土師器 10 点 90.2 g、ロクロ土師器 1 点 30.5 g、須恵器 4 点 50.2g が出土した。この内『調査概要』掲載の 3 点を図示したが、3 点とも注記が「マ 8 溝」であるため、SD08 出土の可能性がある。



第 22 図　第 3 ～ 8 号溝状遺構実測図

時期

出土遺物は、弥生時代後期後半から古墳時代前期の土師器壺・甕、平安時代の須恵器坏・甕等の小片である。図示した資料は、平安時代前期のものであるが、上記のとおり本遺構に伴うものか判断できない。平面図では SD03 を切るため、平安時代から中世の遺構と考えられる。

第 8 号溝状遺構―SD08（第 22 図）

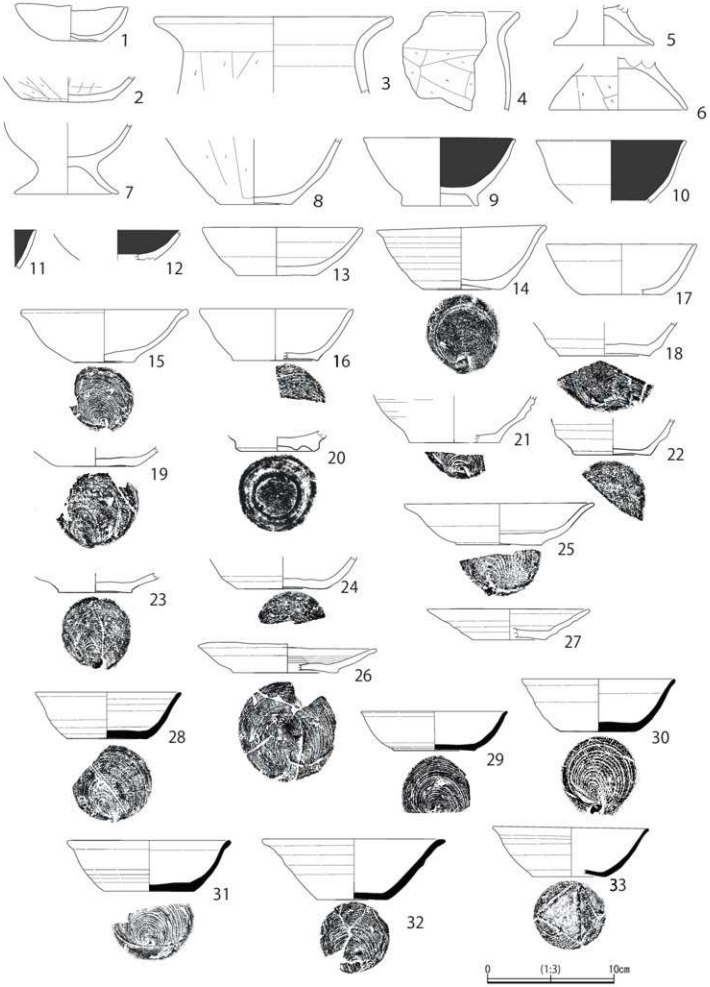
位置：調査区北西側で検出。重複関係：SD02 に切られる。平面形・規模：SD02 から北東に伸びる。長さ 1.3m、上端幅が 0.5m、下端幅 0.3m。確認面からの深さは 0.35m である。断面形状は、不明である。主軸方位：N － 50° － E。覆土：調査時の土層断面図がないため不明。『調査概要』では、最下層はロームブロックが混入した黒褐色土が堆積していると記載されている。

遺物（第 26 図、第 16 表、図版 8）

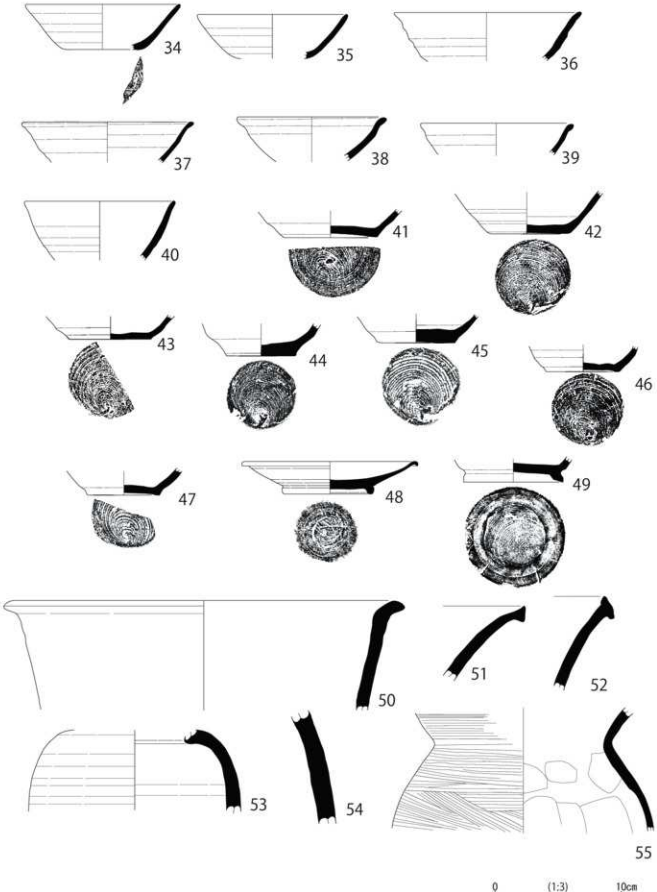
出土状況：本遺構からは、土師器 102 点 1136.0g、ロクロ土師器 2 点 13.6 g、須恵器 17 点 120.8g が出土した。この内 2 点を図示した。

時期

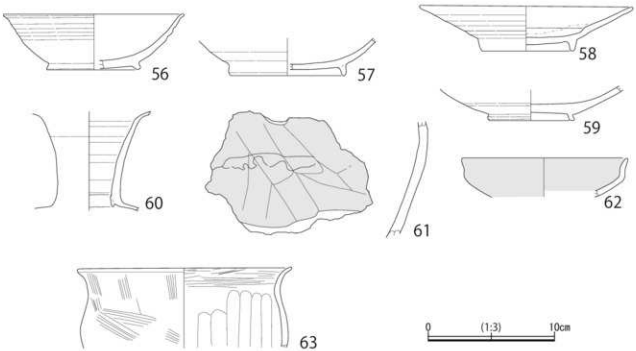
出土遺物から、平安時代前期の 9 世紀前半から中頃と考えられる。



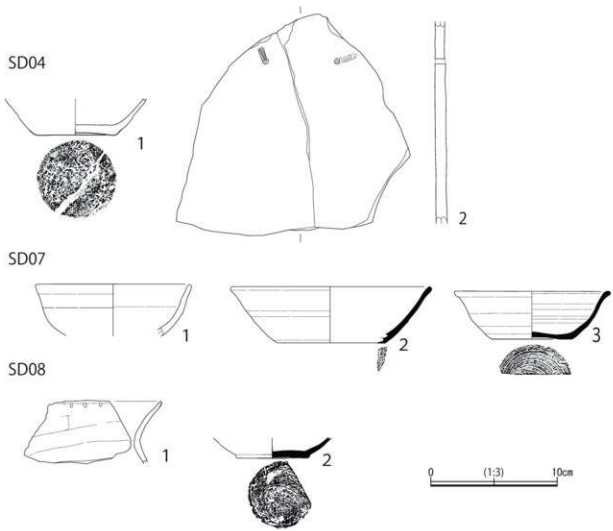
第 23 図　第 3 号溝状遺構出土遺物実測図（1）



第 24 図　第 3 号溝状遺構出土遺物実測図（2）



第 25 図　第 3 号溝状遺構出土遺物実測図（3）



第 26 図　第 4・7・8 号溝状遺構出土遺物実測図

第 13 表　第 3 号溝状遺構出土遺物観察表（1）

挿図番号 図版番号	出土遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量(g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調		備考
23-1 6-(SD)23-1	SD03	土師器 坏	口縁～ 底部	9.0 2.9 3.9	66.1	上げ底状の底部から緩やかに立ち上がる。摩耗しているため全体の調整は不明。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以下白色粒子少量 φ 1mm以下輝石散量	不良	外面 内面	にぶい黄橙(10YR6/4) にぶい黄橙(10YR6/4)	
23-2 6-(SD)23-2	SD03	土師器 坏	胴部～ 底部	－ (2.0) 7.0	90.1	丸底の底部から緩やかに立ち上がる。外面は底部と胴部の一部にケズリ調整をするが、他は指頭痕か、内面ナデ。	φ 1mm以下砂中量	良	外面 内面	にぶい黄橙(10YR7/3) にぶい黄橙(10YR7/3)	戸田市文化財調査報告X集:9-16
23-3 6-(SD)23-3	SD03	土師器 甕	口縁～ 胴部	(19.0) (6.1) －	51.2	胴部から直線的に立ち上がり、口縁は外反する。口縁部外面横ナデ、胴部外面縦ケズリ、内面横ナデ、輪化跡付着。	φ 1mm以下砂多量	良	外面 内面	にぶい黄橙(10YR6/3) 鈍黄(10YR6/1)	
23-4 6-(SD)23-4	SD03	土師器 甕	口縁～ 胴部	－ (7.6) －	37.5	胴部から直線的に立ち上がり、口縁は外反する。口縁部外面横ナデ、胴部外面縦ケズリ、内面横ナデ。	φ 1mm以下砂多量 φ 3mm以下雲母少量 φ 1mm以下雲母多量	良	外面 内面	にぶい橙(5YR6/4) にぶい橙(5YR6/4)	
23-5 6-(SD)23-5	SD03	土師器 台付甕	胴部～ 底部	－ (4.1) (11.0)	88.0	ハの字状に開く胴部、胴部外面上位ナデ、下位縦ケズリ、内面ナデ。	φ 1mm以下砂中量	良	外面 内面	鈍黄(10YR4/1) 鈍黄(10YR4/2)	
23-6 6-(SD)23-6	SD03	土師器 台付甕	胴部～ 底部	－ (3.2) (8.0)	74.7	胴部下位折れ直線的に立ち上がる。内外面ともロクロによる回転ナデ。	φ 1mm以下砂中量	やや良	外面 内面	灰黄褐(10YR6/2) 鈍黄(10YR4/1)	
23-7 6-(SD)23-7	SD03	土師器 台付甕	胴部～ 底部	－ (5.2) (8.0)	87.3	ハの字状に開く胴部、胴部外面上位ナデ、下位縦ケズリ、内面ナデ。	φ 1mm以下砂多量	良	外面 内面	黒褐(10YR3/1) 黒褐(10YR3/1)	戸田市文化財調査報告X集:9-18
23-8 6-(SD)23-8	SD03	土師器 甕	胴部～ 底部	－ (5.2) 5.6	150.2	やや上げ底状の底部から緩やかに立ち上がる。外面は縦ケズリ、内面は摩耗により調整痕不明。	φ 1mm以下砂多量	やや良	外面 内面	にぶい黄橙(10YR6/3) にぶい黄橙(10YR6/3)	
23-9 6-(SD)23-9	SD03	ロクロ 土師器 椀	口縁～ 底部	(12.0) 5.6 6.0	103.2	ロクロ成形、内面横ミガキ、貼付工具台、内面黒色処理。	φ 1mm以下砂中量	良	外面 内面	橙(5YR6/6) 黒褐(10YR3/1)	戸田市文化財調査報告X集:9-1
23-10 6-(SD)23-10	SD03	ロクロ 土師器 椀	口縁～ 胴部	(12.0) (3.0) －	15.7	ロクロ成形、内面横ミガキ、内面黒色処理。	φ 1mm以下砂少量 φ 1mm以下白色粒子少量 φ 1mm以下輝石散量	良	外面 内面	にぶい橙(10YR6/4) 黒褐(10YR3/1)	
23-11 6-(SD)23-11	SD03	ロクロ 土師器 椀	口縁	－ (3.1)	7.9	ロクロ成形、内面横ミガキ、内面黒色処理。	φ 1mm以下砂少量 φ 1mm以下白色粒子少量 φ 1mm以下輝石散量	良	外面 内面	にぶい橙(10YR6/4) 黒褐(10YR3/1)	
23-12 6-(SD)23-12	SD03	ロクロ 土師器 椀	胴部	－ (2.4)	9.9	ロクロ成形、内面横ミガキ、貼付工具台、内面黒色処理。	φ 1mm以下砂少量 φ 1mm以下白色粒子少量 φ 1mm以下輝石散量	良	外面 内面	にぶい橙(7.5YR6/4) 黒褐(10YR3/1)	
23-13 6-(SD)23-13	SD03	ロクロ 土師器 坏	口縁～ 底部	(12.8) 3.8 6.2	151.8	ロクロ成形、摩耗により底部調整痕不明瞭。	φ 1mm以下砂多量	不良	外面 内面	にぶい橙(7.5YR7/4) にぶい橙(7.5YR7/4)	
23-14 6-(SD)23-14	SD03	ロクロ 土師器 坏	口縁～ 底部	15.3 5.1 6.0	195.2	右ロクロ成形、底部回転糸切り、上げ底状、内面ミガキか、内面と底に黒色付着物あり、灯明皿として使用か。	φ 1mm以下砂中量 φ 3mm以下白色粒子少量	良	外面 内面	にぶい黄橙(10YR7/2) にぶい黄橙(10YR7/3)	
23-15 6-(SD)23-15	SD03	ロクロ 土師器 坏	口縁～ 底部	(13.3) 4.2 4.8	55.4	右ロクロ成形、底部回転糸切り。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上雲母少量	良	外面 内面	にぶい黄橙(10YR7/3) にぶい黄橙(10YR7/3)	
23-16 7-(SD)23-16	SD03	ロクロ 土師器 坏	口縁～ 底部	(12.0) 3.8 (6.0)	32.1	ロクロ成形。	φ 1mm以下砂多量	やや良	外面 内面	にぶい橙(7.5YR7/4) にぶい橙(7.5YR7/4)	戸田市文化財調査報告X集:9-4
23-17 7-(SD)23-17	SD03	ロクロ 土師器 坏	口縁～ 底部	(12.0) 4.0 (6.4)	40.5	摩耗により調整痕不明瞭。	φ 1mm以下砂中量	不良	外面 内面	浅黄橙(7.5YR8/3) にぶい橙(7.5YR7/4)	
23-18 7-(SD)23-18	SD03	ロクロ 土師器 坏	胴部～ 底部	－ (2.4) (6.2)	38.1	右ロクロ成形、底部回転糸切り。	φ 1mm以下砂多量	やや良	外面 内面	にぶい橙(7.5YR7/4) にぶい橙(7.5YR7/4)	戸田市文化財調査報告X集:9-5
23-19 7-(SD)23-19	SD03	ロクロ 土師器 坏	底部	－ (1.5) (6.0)	44.0	ロクロ成形。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上雲少量	やや不良	外面 内面	浅黄橙(7.5YR8/3) 浅黄橙(7.5YR8/3)	
23-20 7-(SD)23-20	SD03	ロクロ 土師器 坏	底部	－ (1.6) (3.8)	59.2	ロクロ成形、底部外面を回転ナデ、中央を一ヘラ削り。	φ 1mm以下砂少量 φ 1mm以下白色粒子少量 φ 1mm以下輝石散量	良	外面 内面	にぶい黄橙(10YR7/3) 橙(7.5YR6/6)	
23-21 7-(SD)23-21	SD03	ロクロ 土師器 坏	胴部～ 底部	－ (3.7) (6.0)	31.3	右ロクロ成形、底部回転糸切り。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上雲少量	良	外面 内面	にぶい黄橙(10YR5/4) にぶい黄橙(10YR5/4)	戸田市文化財調査報告X集:9-12
23-22 7-(SD)23-22	SD03	ロクロ 土師器 坏	胴部～ 底部	－ (2.7) (5.6)	26.8	ロクロ成形、底部摩耗により調整痕不明瞭。	φ 1mm以下砂中量	やや不良	外面 内面	橙(7.5YR6/6) 橙(7.5YR6/6)	戸田市文化財調査報告X集:9-13
23-23 7-(SD)23-23	SD03	ロクロ 土師器 坏	底部	－ (1.5) (5.9)	47.9	右ロクロ成形、底部回転糸切り後にヘラ記号。	φ 1mm以下砂少量	良	外面 内面	浅黄橙(7.5YR8/4) 浅黄橙(7.5YR8/4)	
23-24 7-(SD)23-24	SD03	ロクロ 土師器 坏	胴部～ 底部	－ (2.1) (7.0)	59.2	ロクロ成形、底部外周を回転ナデ。	φ 1mm以下砂中量	やや不良	外面 内面	にぶい橙(7.5YR7/4) にぶい橙(7.5YR7/4)	戸田市文化財調査報告X集:9-22

第 14 表　第 3 号溝状遺構出土遺物観察表（2）

図版番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量(g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調		備考
23-25 7-(SD03)-25	SD03	ロクロ 土師器 黒	口縁～ 底部	(15.0) 2.5 (6.6)	76.1	右ロクロ成形、底部回転糸切り。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上礫少量	中 良	外面	にぶい橙(7.5YR7/4)	戸田市文化財調査報告第十五
									内面	にぶい橙(7.5YR7/4)	
23-26 7-(SD03)-26	SD03	ロクロ 土師器 黒	口縁～ 底部	(4.2) 3.4 8.2	166.0	右ロクロ成形、底部回転糸切り。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上礫少量	良	外面	にぶい橙(7.5YR7/4)	
									内面	にぶい橙(7.5YR7/4)	
23-27 7-(SD03)-27	SD03	ロクロ 土師器 黒	口縁～ 底部	(12.3) (1.5) (5.9)	34.1	ロクロ成形。摩耗により底部調整痕不明瞭。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上礫少量	良	外面	橙(7.5YR7/6)	戸田市文化財調査報告第十四
									内面	橙(7.5YR7/6)	
23-28 7-(SD03)-28	SD03	須恵器 坏	口縁～ 底部	(11.6) 3.7 6.2	93.7	右ロクロ成形、底部回転糸切り後にヘラ記号。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上礫少量	良	外面	灰(5Y5/1)	
									内面	灰(5Y5/1)	
23-29 7-(SD03)-29	SD03	須恵器 坏	口縁～ 底部	(11.6) 3.1 (6.4)	44.4	右ロクロ成形、底部回転糸切り。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上礫多量	良	外面	褐灰(10YR6/1)	
									内面	褐灰(10YR6/1)	
23-30 7-(SD03)-30	SD03	須恵器 坏	口縁～ 底部	12.0 4.0 6.0	112.6	右ロクロ成形、底部回転糸切り後にヘラ記号。底部の一部が出っ張っているため横。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上礫少量	良	外面	灰(5Y5/1)	戸田市文化財調査報告第十四
									内面	灰(5Y5/1)	
23-31 7-(SD03)-31	SD03	須恵器 坏	口縁～ 底部	(13.0) 4.1 (7.0)	78.6	右ロクロ成形、底部回転糸切り。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上礫中量 白色粘状物質少量	良	外面	灰白(5Y7/1)	戸田市文化財調査報告第十五 12、興亡企画
									内面	灰白(5Y7/1)	
23-32 7-(SD03)-32	SD03	須恵器 坏	口縁～ 底部	(14.0) 4.7 5.7	107.2	右ロクロ成形、底部回転糸切り後に四辺平行ヘラ削り。	φ 1mm以下砂少量 φ 1mm以下白色粒子少量 φ 3mm以上礫微量	良	外面	灰褐(5YR6/2)	戸田市文化財調査報告第十五 18
									内面	灰褐(5YR6/2)	
23-33 7-(SD03)-33	SD03	須恵器 坏	口縁～ 底部	12.4 4.0 5.7	76.0	右ロクロ成形、底部回転糸切り。一部酸化焼成。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上礫微量 白色粘状物質多量	良	外面	にぶい橙(7.5YR6/4)	戸田市文化財調査報告第十五 2-5-14、興亡企画
									内面	にぶい橙(7.5YR6/4)	
24-34 7-(SD03)-34	SD03	須恵器 坏	口縁～ 底部	(12.4) 3.6 (6.0)	35.6	ロクロ成形、底部回転糸切り。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上礫微量	良	外面	灰(5Y6/1)	興亡企画
									内面	灰(5Y6/1)	
24-35 7-(SD03)-35	SD03	須恵器 坏	口縁～ 胴部	(13.0) (3.5) ～	23.0	ロクロ成形。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上礫多量	良	外面	灰(5Y5/1)	戸田市文化財調査報告第十五 18
									内面	灰(5Y5/1)	
24-36 7-(SD03)-36	SD03	須恵器 坏	口縁～ 胴部	(14.0) 5.2 ～	18.3	ロクロ成形。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上礫微量 白色粘状物質少量	良	外面	灰(5Y6/1)	戸田市文化財調査報告第十五 8、興亡企画
									内面	灰(5Y6/1)	
24-37 7-(SD03)-37	SD03	須恵器 坏	口縁～ 胴部	(12.0) (3.6) ～	23.9	ロクロ成形。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上礫少量	良	外面	灰(5Y5/1)	戸田市文化財調査報告第十五 13
									内面	灰(5Y5/1)	
24-38 7-(SD03)-38	SD03	須恵器 坏	口縁～ 胴部	(14.0) (3.3) ～	15.6	ロクロ成形。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上礫中量	良	外面	灰黄(2.5Y6/2)	戸田市文化財調査報告第十五 14
									内面	灰黄(2.5Y6/2)	
24-39 7-(SD03)-39	SD03	須恵器 坏	口縁～ 胴部	(14.0) (2.8) ～	8.4	ロクロ成形。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上礫少量	良	外面	灰(5Y6/1)	戸田市文化財調査報告第十五 17
									内面	灰(5Y6/1)	
24-40 7-(SD03)-40	SD03	須恵器 坏	口縁～ 胴部	(12.0) (4.7) ～	32.2	ロクロ成形。	φ 1mm以下砂中量	良	外面	灰白(10YR/2)	
									内面	灰白(10YR/2)	
24-41 7-(SD03)-41	SD03	須恵器 坏	胴部～ 底部	(1.9) (7.2)	47.4	右ロクロ成形、底部回転糸切り後に底部回転ヘラ削り。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上礫微量 白色粘状物質少量	良	外面	灰(5Y6/1)	戸田市文化財調査報告第十五 21、興亡企画
									内面	灰(5Y6/1)	
24-42 7-(SD03)-42	SD03	須恵器 坏	胴部～ 底部	～ (3.4) 5.8	80.8	右ロクロ成形、底部回転糸切り。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上礫少量	良	外面	灰(5Y5/1)	
									内面	灰(5Y5/1)	
24-43 7-(SD03)-43	SD03	須恵器 坏	胴部～ 底部	～ (1.7) (6.3)	32.0	右ロクロ成形、底部回転糸切り。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上礫微量	良	外面	灰(5Y5/1)	戸田市文化財調査報告第十五 19
									内面	灰(5Y5/1)	
24-44 7-(SD03)-44	SD03	須恵器 坏	胴部～ 底部	～ (2.4) (5.5)	56.2	右ロクロ成形、底部回転糸切り。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上礫微量	良	外面	灰(5Y5/1)	戸田市文化財調査報告第十五 20
									内面	灰(5Y5/1)	
24-45 7-(SD03)-45	SD03	須恵器 坏	胴部～ 底部	～ (2.2) 6.2	88.2	右ロクロ成形、底部回転糸切り。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上礫中量	良	外面	灰黄(2.5Y6/2)	
									内面	灰褐(7.5YR6/2)	
24-46 7-(SD03)-46	SD03	須恵器 坏	胴部～ 底部	～ (2.6) (5.8)	52.1	右ロクロ成形、底部回転糸切り。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上礫微量 白色粘状物質少量	良	外面	灰(5Y6/1)	戸田市文化財調査報告第十五 23、興亡企画
									内面	灰(5Y6/1)	
24-47 7-(SD03)-47	SD03	須恵器 坏	胴部～ 底部	～ (1.7) 6.3	21.8	右ロクロ成形、底部回転糸切り。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上礫微量	良	外面	灰(5Y5/1)	戸田市文化財調査報告第十五 24
									内面	灰(5Y5/1)	
24-48 7-(SD03)-48	SD03	須恵器 甕	口縁～ 底部	(14.0) 2.6 ～	132.4	ロクロ成形、底部回転ヘラ削り。貼付け高台。	φ 1mm以下白色粒少量 φ 3mm程礫微量	良	外面	灰白(5Y7/1)	戸田市文化財調査報告第十五 1、興亡企画
									内面	灰白(5Y7/1)	
24-49 7-(SD03)-49	SD03	須恵器 長頸壺	底部	(1.8) 7.8	68.5	ロクロ成形、底部回転糸切り後に高台貼付け。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上礫微量	良	外面	灰(5Y6/1)	戸田市文化財調査報告第十五 9
									内面	灰(5Y6/1)	

第 15 表　第 3 号溝状遺構出土遺物観察表（3）

図版番号 図版番号	出土遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量(g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調		備考
24-50 7-(SD03)-50	SD03	須恵器 壺	口縁～ 胴部	(32.0) (8.6) -	155.2	ロクロ成形。	φ 1mm以下砂少量 φ 1mm以下白色粒子少量	良	外面	灰(5Y5/1)	
									内面	灰(5Y5/1)	
24-51 8-(SD03)-51	SD03	須恵器 壺	口縁～ 胴部	- (5.9) -	159.5	ロクロ成形。自然釉。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上雲母少量	良	外面	灰(5GY5/1)	
									内面	灰白(5Y7/1)	
24-52 8-(SD03)-52	SD03	須恵器 壺	口縁～ 胴部	- (7.5) -	102.5	ロクロ成形。	φ 1mm以下砂少量 白色針状物質少量	良	外面	灰(5Y5/1)	西比企産
									内面	灰(5Y5/1)	
24-53 8-(SD03)-53	SD03	須恵器 壺	胴部	- (6.4) -	106.8	ロクロ成形。自然釉。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上雲母少量	良	外面	灰(5Y5/1)	
									内面	灰(5Y4/1)	
24-54 8-(SD03)-54	SD03	須恵器 壺	胴部	- (9.0) -	226.3	ロクロ成形。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上雲母少量	良	外面	灰(5Y6/1)	
									内面	灰(5Y6/1)	
24-55 8-(SD03)-55	SD03	須恵器 壺	胴部	- (8.8) -	153.7	ロクロ成形。外面ハケ。内面に指頭圧痕。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上雲多量	良	外面	灰(5Y6/1)	戸辺市文化財調査報告第 8 集 p-28
									内面	灰(5Y6/1)	
25-56 8-(SD03)-56	SD03	灰釉陶器 碗	口縁～ 底部	(14.0) 4.5 (6.6)	73.3	底部の上縁やや立ち上がり、口縁部がやや外反する。ロクロ成形。内面施釉。削り出し高台。	φ 1mm以上白色粒少量 φ 2mm程微量	良	外面	灰(5Y6/1)	戸辺市文化財調査報告第 8 集 p-8、9 埋蔵物中
									内面	灰白(5Y7/2)	
25-57 8-(SD03)-57	SD03	灰釉陶器 碗	口縁～ 底部	- (3.6) (9.0)	52.7	底部から緩やかに立ち上がる。ロクロ成形。底部回転ヘラ削り後に高台貼付け。内面施釉。口縁部は確認できない。	φ 1mm以上黒色粒少量 φ 2mm程少量	良	外面	灰白(2.5Y7/1)	戸辺市文化財調査報告第 8 集 p-8、9 埋蔵物中
									内面	灰白(2.5Y7/1)	埋蔵物
25-58 8-(SD03)-58	SD03	灰釉陶器 段皿	口縁～ 底部	16.9 3.7 2.6	229.1	外側端部の段皿。ロクロ成形。底部回転ヘラ削り後に高台貼付け。内面施釉をハケ状工具で施釉後に内面中央を抽出。内面中央に高台痕跡。	φ 1mm以下黒色粒子少量 φ 3mm微微量	良	外面	灰白(5Y7/1)	戸辺市文化財調査報告第 8 集 p-8、9 埋蔵物中
									内面	灰白(5Y7/2)	埋蔵物
25-59 8-(SD03)-59	SD03	灰釉陶器 皿	胴部～ 底部	- (2.0) (2.4)	44.9	底部から緩やかに立ち上がる。ロクロ成形。内外面施釉。内面にナデ痕が。削り出し高台。	φ 1mm程黒色粒少量	良	外面	灰白(5Y7/1)	戸辺市文化財調査報告第 8 集 p-8、9 埋蔵物中
									内面	明オリーブ(5Y4/3)	
25-60 8-(SD03)-60	SD03	灰釉陶器 長頸瓶	頸部～ 胴部	- (7.9)	100.7	頸部下部を最小径に持ち、外反しながら口縁に至る。ロクロ成形。頸部接合部を粘土帯で補強。内外面ロクロ目。内外面に施釉。外面に釉垂れ。	φ 1mm程黒色粒少量	良	外面	灰オリーブ(5Y6/2)	戸辺市文化財調査報告第 8 集 p-8、9 埋蔵物中
									内面	オリーブ黄(5Y6/3)	埋蔵物
25-61 8-(SD03)-61	SD03	土師器 壺	胴部	- (9.2)	115.3	底部の広立ち上がる。外面横ナデ。内面ナデ。赤彩。外面に粘土帯。	φ 1mm以下砂少量 φ 3mm以上シャモット少量	良	外面	にぶい黄橙(10YR7/4)	古墳時代前期
									内面	にぶい黄橙(10YR7/4)	
25-62 8-(SD03)-62	SD03	土師器 坏	口縁～ 胴部	(10.0) (3.2)	10.0	丸底状の底部から直線的に開き、胴部から外反し口縁に至る。口縁外面横ナデ。胴部外面ケズリ。内面ナデ。内外面赤彩。	φ 1mm以下砂多量	良	外面	にぶい黄橙(10YR7/3)	戸辺市文化財調査報告第 8 集 p-10、古墳時代後期
									内面	にぶい黄橙(10YR7/3)	
25-63 8-(SD03)-63	SD03	土師器 壺	口縁～ 胴部	(16.0) (5.6) (5.7)	29.8	やや球胴化している胴部から緩く外反し、口縁に至る。外面縦ハケ。口縁部内面横ハケ。胴部内面縦ナデ。	φ 1mm以下砂少量	良	外面	灰黄褐(10YR4/2)	戸辺市文化財調査報告第 8 集 p-10、古墳時代後期
									内面	灰黄褐(10YR4/2)	

第 16 表　第 4・7・8 号溝状遺構出土遺物観察表

図版番号 図版番号	出土遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量(g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調		備考
26-(SD04)-1 8-(SD04)-1	SD04	ロクロ 土師器 坏	胴部～ 底部	(2.9) 6.2 -	36.3	ロクロ成形。底部回転糸切による不明瞭。	φ 1mm以下砂少量 φ 1mm以下白色粒子少量	やや 不良	外面	橙(2.5YR7/8)	
									内面	橙(2.5YR7/8)	
26-(SD04)-2 8-(SD04)-2	SD04	土製品 土板		-	271.6	厚い土板。円形の穴が計5個あり、時すれの跡が付く。	φ 1mm以下砂少量 φ 1mm以下雲母少量	やや 良	外面	にぶい黄橙(10YR6/3)	戸辺市文化財調査報告第 12
									内面	にぶい黄橙(10YR6/3)	
26-(SD07)-1 8-(SD07)-1	SD07	ロクロ 土師器 坏	口縁～ 胴部	(12.4) (4.4) -	29.4	ロクロ成形。	φ 1mm以下砂少量 φ 5mm以上雲母多量	やや 不良	外面	橙(5YR6/8)	戸辺市文化財調査報告第 11 集
									内面	橙(5YR7/6)	
26-(SD07)-2 8-(SD07)-2	SD07	須恵器 坏	口縁～ 底部	(16.0) (5.6) (6.8)	30.5	ロクロ成形。底部回転糸切り。	φ 1mm以下砂少量 白色針状物質少量	良	外面	にぶい橙(7.5YR7/3)	戸辺市文化財調査報告第 11 集
									内面	にぶい橙(7.5YR7/3)	
26-(SD07)-3 8-(SD07)-3	SD07	須恵器 坏	口縁～ 底部	(14.0) 4.0 (7.8)	33.8	ロクロ成形。底部回転糸切り。	φ 1mm以下砂少量 φ 5mm以上雲母少量	良	外面	褐灰(2.5YR6/1)	戸辺市文化財調査報告第 11 集、西比企産
									内面	褐灰(2.5YR6/1)	
26-(SD08)-1 8-(SD08)-1	SD08	土師器 壺	胴部～ 底部	- (5.0) -	39.9	胴部縦に絞典し、立ち上がる。口縁部やや反。外面・内面横ナデ。胴部外面多量に付着。	φ 1mm以下砂少量 φ 5mm以上雲母少量	良	外面	灰褐(7.5YR5/2)	
									内面	にぶい橙(7.5YR7/3)	
26-(SD08)-2 8-(SD08)-2	SD08	須恵器 坏	胴部～ 底部	- (1.7) (5.6)	29.1	ロクロ成形。底部回転糸切り。	φ 1mm以下砂少量 φ 1mm以下白色粒子少量 φ 5mm以上雲母多量	良	外面	灰(5YR5/1)	
									内面	灰(5YR5/1)	

2　土坑

第１号土坑―SK01（第 27 図）

位置：調査区南西壁際で検出。重複関係：なし。平面形・規模：平面状では方形を呈し、南西側は調査区外に延びる。長軸 1.2m、短軸 1.1m、深さは 0.2m である。断面形状は不明。主軸方位：N －60°－W。覆土：調査時の土層断面図がないため不明。『調査概要』ではロームブロック、赤色粒子、カーボン粒子を少量含んだ黒色土が堆積していると記載されている。

遺物（第 28 図、第 17 表、図版８）

出土状況：本遺構からは、土師器 18 点 355.8 ｇ、須恵器１点 1.2g が出土している。この内３点を図示した。なお、『調査概要』図 10 －１の壺は注記が「マ方周東壙」となっており、第１号周溝状遺構から出土した可能性が高いため図示しなかった。

時期

口縁部が肥厚し、粗略化している３の甕が出土しているため、平安時代前期の９世紀後半ごろと考えられる。

第２号土坑―SK02（第 27 図）

位置：調査区南西壁際で検出。重複関係：なし。平面形・規模：平面状では方形を呈し、南西側は調査区外に延びる。長軸 0.4m、深さは 0.2m である。断面形状は不明。主軸方位:N －60°－W。覆土:調査時の土層断面図がないため不明。『調査概要』ではロームブロック、赤色粒子、カーボン粒子を少量含んだ黒色土が堆積していると記載されている。

遺物

出土状況：本遺構からは、土師器９点 71.6 ｇが出土している。破片資料が多く図示できなかった。

時期

出土遺物から平安時代と考えられる。

第４号土坑―SK04（第 27 図）

位置：調査区南壁際で検出。重複関係：なし。平面形・規模：円形を呈す。上端長軸 1.05m、短軸 0.97m、下端長軸 0.74m、短軸 0.6m、深さは 0.94m である。断面形状は中層の壁が膨らんでいるが、元は長方形とみられる。井戸跡の可能性がある。主軸方位：N －60°－W。覆土：調査時の土層断面図がないため不明。『調査概要』では SK03 と同様と記載されている。

遺物（第 28 図、第 17 表、図版９）

出土状況：本遺構からは、土師器 26 点 426.6 ｇ、ロクロ土師器１点 16.8g 須恵器 24 点 732.9 ｇが出土している。この内８点を図示した。

時期

９世紀前半から後半の須恵器坏が出土している。流れ込みの可能性があるが、９世紀後半には埋没したと考えられる。

第５号土坑―SK05（第 27 図）

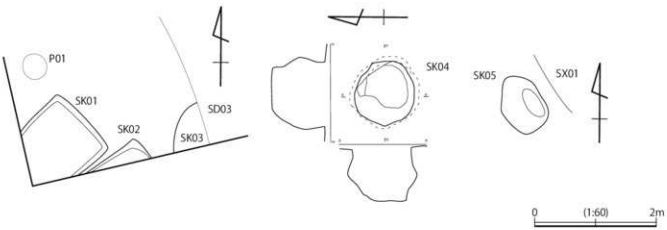
位置：調査区西側で検出。重複関係：なし。平面形・規模：楕円形を呈す。上端長軸 1m、短軸 0.7m、下端長軸 0.7m、短軸 0.3m、深さは不明。主軸方位：N － 60° － W。覆土：調査時の土層断面図がないため不明。

遺物

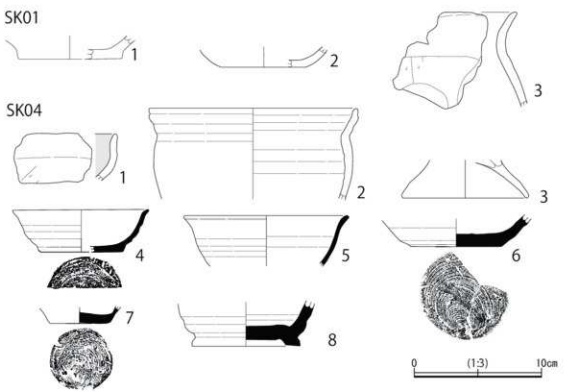
出土状況：本遺構からは、土師器４点 17.0 ｇが出土した。破片資料が多く図示できなかった。

時期

出土遺物から、平安時代と考えられる。



第 27 図　第１・２・４・５号土坑実測図



第 28 図　第１・４号土坑出土遺物実測図

第 17 表　第 1 ・ 4 号溝状遺構出土遺物観察表

図版番号 図版番号	出土遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量(g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調 外面 内面	備考
29−SK01−1 8−SK01−1	SK01	土師器 皿	底部	− (3.2) (9.2)	89.1	平底の底部から、やや内傾して立ち上がる。外面・内面ナデ。	◇1mm以下砂少量 ◇3mm以上シャモット中量	良	外面 にぶい橙(7.5YR7/4) 内面 にぶい橙(7.5YR7/3)	『明治神宮外苑調査報告X』図版16−2
29−SK01−2 9−SK01−2	SK01	土師器 坏	口縁〜胴部	− (7.5) −	9.5	平底の底部から直線的に立ち上がる。全体的に摩耗しているため調整痕不明瞭。	◇1mm以下砂少量	不良	外面 にぶい橙(7.5YR7/3) 内面 にぶい橙(7.5YR7/3)	
29−SK01−3 8−SK01−3	SK01	土師器 甕	口縁〜胴部	− (3.7) −	39.8	胴部から緩く立ち上がり、口縁部はやや内傾する。口縁部外面横ナデ、胴部縦ケズリ、内面横ナデ。	◇1mm以下砂少量 ◇1mm以下白色粒子中量 ◇1mm以下雲母少量	良	外面 浅黄橙(7.5YR8/4) 内面 浅黄橙(7.5YR8/4)	
29−SK04−1 9−SK04−1	SK04	土師器 坏	口縁〜胴部	− (3.9) −	21.0	やや外反し、立ち上がる。摩耗により調整痕不明瞭。	◇1mm以下砂少量 ◇1mm以下白色粒子少量	不良	外面 橙(7.5YR7/6) 内面 橙(7.5YR7/6)	
29−SK04−2 9−SK04−2	SK04	ロクロ土師器 甕	口縁〜胴部	− (15.2) (7.1)	84.0	口縁部横ナデによりS字状の凹線がでる。胴部外面縦ケズリ、内面ロクロナデ。	◇1mm以下砂少量	良	外面 浅黄橙(7.5YR8/4) 内面 灰褐(7.5YR5/2)	『明治神宮外苑調査報告X』図版17−4
29−SK04−3 9−SK04−3	SK04	土師器 甕	胴部	− (3.9) (10.0)	24.1	ハの字状に開く胴部。内外面摩耗により調整痕不明瞭。	◇1mm以下砂少量	やや不良	外面 橙(2.5YR7/6) 内面 橙(2.5YR6/6)	
29−SK04−4 9−SK04−4	SK04	須恵器 坏	胴部 底部	(11.0) 3.5 (5.4)	45.0	ロクロ成形、底部回転糸切り。	◇1mm以下砂少量 ◇1mm以下白色粒子中量 ◇5mm以下雲母少量	良	外面 5C(5YR5/1) 内面 5C(5YR5/1)	『明治神宮外苑調査報告X』図版17−6
29−SK04−5 9−SK04−5	SK04	須恵器 坏	口縁〜胴部	(13.0) (4.0) −	13.1	ロクロ成形。	◇1mm以下砂少量 ◇1mm以下白色粒子少量	良	外面 5C(5YR6/1) 内面 5C(5YR6/1)	
29−SK04−6 9−SK04−6	SK04	須恵器 坏	胴部〜底部	− (2.1) (7.8)	102.4	右ロクロ成形、底部回転糸切り。底部中央の一部にナデ。	◇1mm以下砂少量 ◇1mm以下白色粒子中量 ◇5mm以下雲母量	良	外面 5C(5YR6/1) 内面 5C(5YR6/1)	『明治神宮外苑調査報告X』図版17−8
29−SK04−7 9−SK04−7	SK04	須恵器 坏	胴部〜底部	− (1.1) (5.6)	33.5	右ロクロ成形、底部回転糸切り。	◇1mm以下砂中量 ◇1mm以下白色粒子少量 白色針状物質	良	外面 5C(5Y4/1) 内面 5C(5Y4/1)	『明治神宮外苑調査報告X』図版17−9、西尾光一氏
29−SK04−8 9−SK04−8	SK04	須恵器 長頸瓶	胴部〜底部	− (3.6) (8.6)	231.4	ロクロ成形、底部回転ヘラ削り。貼付け高台。	◇1mm以下砂中量 ◇1mm以下白色粒子多量 ◇5mm以下雲少量	良	外面 5C(5Y5/1) 内面 5C(5Y6/1)	『明治神宮外苑調査報告X』図版17−10

3　ピット

本調査では、ピットを平面図で 4 基検出した。詳細な平面図及び断面図がないため、形状等は不明である。『調査概要』では、ピット群について直径 0.3m の円形で、深さは 0.05 ～ 0 .1m と記載している。

遺物

P01 からは土師器 2 点 15.6g が出土し、その他「マ第 5 ピット」（以下「P05」という）と注記がある土師器 2 点 4.3g を確認した。注記上では、ピットが 5 基あった可能性があるが平面図上では 4 基しか確認できないため、P05 の位置は不明である。また、図 17―22 の台付甕には「P01」と注記されている遺物が複数接合した。遺物はいずれも小片であるため図示できなかった。

時期

時期は、P01 及び P05 は出土遺物から平安時代の可能性が高く、その他のピットは遺物が出土していないため時期不明である。

4　不明遺構・遺構外出土遺物

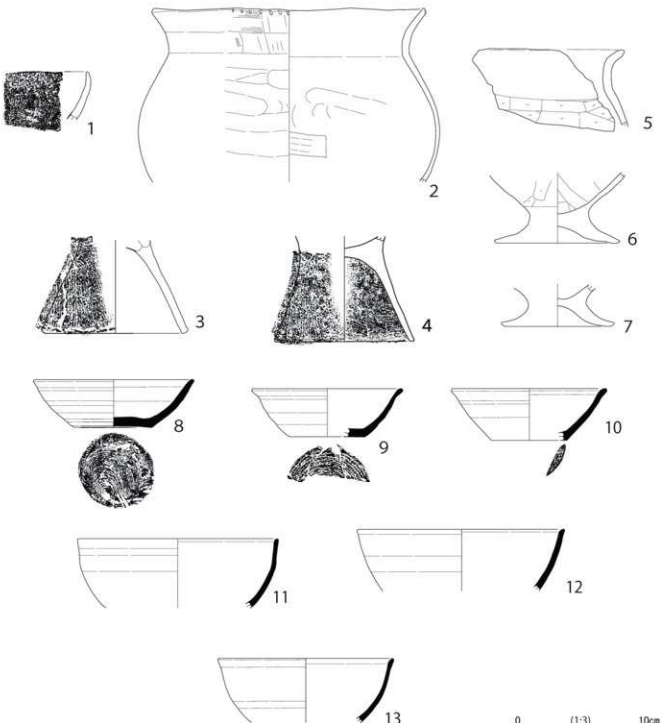
遺物（第 29・30 図、第 18・19 表、図版 9 ）

本調査では遺構外から土師器 1108 点 5991.1 g 、ロクロ土師器 47 点 233.5g、須恵器 176 点 2603.4g、青磁 2 点 50.2g、陶器 39 点 1202.2g、土器 20 点 267.2g、土製品 1 点 25.3g、瓦 9 点 865.5 g 、石 1 点 35.1g を検出した。

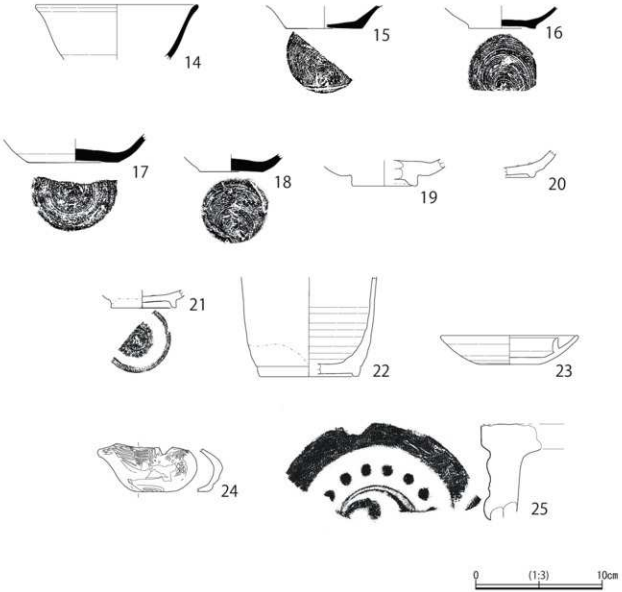
遺構外の他に、注記では「マ 9 溝」と記載されている土師器 14 点 84.3g、注記が判読できない土師器 1 点 5.8g を確認している。

第９溝については平面図上でも確認できないため、どの地点から出土したかは不明である。なお、『調査概要』では「マ５溝」と注記している遺物を「第２号方形周溝墓」の遺物としており、調査時は「第２号方形周溝墓」が「第５溝」であったとみられる。そのため、本報告の SD05 が第９溝 に該当する可能性がある。

遺構外出土遺物は、25 点の資料を図示した。また、第 20 表に遺構出土遺物及び遺構外出土遺物の点数、重量を示した。



第 29 図　遺構外出土遺物実測図（１）



第 30 図　遺構外出土遺物実測図（2）

第 18 表　遺構外出土遺物観察表（1）

掲図番号 図版番号	出土遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量(g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調		備考
29-1 ＊(遺構外)1	遺構外	土師器 坩	口縁	(3.8) -	19.4	内彎気味に立ち上がる。口縁部外面に斜縞文。文様下縁ミガキ。赤彩。	φ 1mm以下砂少量 φ 1mm以下白色粒子少量	良	外面	にぶい橙(7.5YR6/4)	
									内面	灰褐(7.5YR6/2)	
29-2 ＊(遺構外)2	遺構外	土師器 壺	口縁～頸部	(21.8) (13.8)	280.0	頸部は緩やかに屈曲。頸部は中央部が最大径となる。口唇部ヤザミ。口縁部外面縦ナデ。内面ナデ。指押さえ痕が残る。	φ 1mm以下砂少量 φ 2mm以上シャモット少量	良	外面	灰褐(7.5YR6/2)	
									内面	にぶい橙(7.5YR7/3)	
29-3 ＊(遺構外)3	遺構外	土師器 台付甕	脚部～底部	(7.4) (10.4)	101.2	ハの字状に開く脚部。外面縦ヘラ。内面ヨコナデ。下部はヨコヘラ。	φ 1mm以下砂少量 φ 1mm以下白色粒子少量 φ 3mm以上礫少量	良	外面	にぶい黄(7.5YR6/3)	
									内面	にぶい黄(7.5YR6/3)	
29-4 ＊(遺構外)4	遺構外	土師器 台付甕	脚部～底部	(8.4) 11.1	266.2	ハの字状に開く脚部。外面縦ヘラ。内面ヨコナデ。下部はヨコヘラ。	φ 1mm以下砂中量 φ 1mm以下白色粒子微量 φ 3mm以上礫中量	良	外面	にぶい橙(2.5YR7/4)	
									内面	橙(2.5YR7/6)	
29-5 ＊(遺構外)5	遺構外	土師器 壺	口縁部～頸部	- (6.1)	50.3	口縁が外反して立ち上がる。頸部は「コ」の字状を呈す。口縁部外面縦ナデ。頸部外面縦ニンマリ。内面縦ナデ。	φ 1mm以下砂少量 φ 1mm以下赤色粒子微量	良	外面	橙(7.5YR7/6)	コ」の字状
									内面	にぶい褐(7.5YR5/3)	

第19表　遺構外出土遺物観察表（2）

挿図番号 図版番号	出土遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量(g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調		備考
29-6 9（遺構外）6	遺構外	土師器 台付甕	脚部～底部	- (3.6) (10.0)	126.2	脚部は緩やかに屈曲し脚部に至る。脚部外面・内面ロクロによるナデ。胴部外面縦ケズリ、内面縦ナデ。	φ1mm以下砂少量	良	外面	灰褐(7.5YR5/2)	
									内面	にぶい橙(7.5YR6/3)	
29-7 9（遺構外）7	遺構外	土師器 台付甕	脚部～底部	- (3.3) (9.0)	75.6	脚部は緩やかに屈曲し脚部に至る。脚部外面・内面ロクロによるナデ。胴部内面ナデ。	φ1mm以下砂少量	良	外面	褐灰(7.5YR6/1)	
									内面	橙(7.5YR4/1)	
29-8 9（遺構外）8	遺構外	須恵器 坏	口縁～底部	(12.8) (3.8) (6.2)	103.2	右ロクロ成形。底部回転糸切り。	φ1mm以下砂少量 φ3mm以上礫少量 白色針状物質多量	良	外面	黄灰(2.5Y6/1)	南比企産
									内面	黄灰(2.5Y6/1)	
29-9 9（遺構外）9	遺構外	須恵器 坏	口縁～底部	(12.0) 3.9 (5.8)	46.5	ロクロ成形。底部回転糸切り。	φ1mm以下砂少量 φ3mm程礫少量 白色針状物質少量	良	外面	灰白(2.5Y7/1)	南比企産
									内面	灰白(2.5Y7/1)	
29-10 9（遺構外）10	遺構外	須恵器 坏	口縁～底部	(12.4) 4.1 (6.0)	29.2	ロクロ成形。底部回転糸切り。	φ1mm以下砂少量 φ3mm以上礫無量	良	外面	黄灰(2.5Y5/1)	
									内面	黄灰(2.5Y5/1)	
29-11 9（遺構外）11	遺構外	須恵器 坏	口縁～胴部	(15.0) (3.5) -	25.3	ロクロ成形。	φ1mm以下砂少量 φ3mm程礫少量 白色針状物質少量	良	外面	黄灰(2.5Y6/1)	南比企産
									内面	黄灰(2.5Y6/1)	
29-12 9（遺構外）12	遺構外	須恵器 坏	口縁～胴部	(16.5) (4.9) -	18.0	ロクロ成形。	φ1mm以下砂少量 φ3mm程礫無量	良	外面	黄灰(2.5Y5/1)	
									内面	黄灰(2.5Y5/1)	
29-13 9（遺構外）13	遺構外	須恵器 坏	口縁～胴部	(14.0) (3.1) -	29.1	ロクロ成形。	φ1mm以下砂少量 φ3mm程礫少量 白色針状物質少量	良	外面	黄灰(2.5Y5/1)	南比企産
									内面	黄灰(2.5Y5/1)	
30-14 9（遺構外）14	遺構外	須恵器 坏	口縁～胴部	(13.0) (4.4) -	19.2	ロクロ成形。	φ1mm以下砂少量 φ1mm以下白色粒子少量 φ3mm程礫少量	良	外面	黄灰(2.5Y5/1)	
									内面	黄灰(2.5Y5/1)	
30-15 9（遺構外）15	遺構外	須恵器 坏	胴部～底部	- (1.8) (6.0)	34.1	左ロクロ成形。底部回転糸切り、ヘラ記号。	φ1mm以下砂少量 φ1mm以下白色粒子少量 φ3mm程礫少量	良	外面	黄灰(2.5Y6/1)	
									内面	黄灰(2.5Y6/1)	
30-16 9（遺構外）16	遺構外	須恵器 坏	胴部～底部	- (1.7) (5.3)	29.7	右ロクロ成形。底部回転糸切り。	φ1mm以下砂少量 φ3mm程礫少量 白色針状物質少量	良	外面	暗灰黄(2.5Y5/2)	南比企産
									内面	暗灰黄(2.5Y5/2)	
30-17 9（遺構外）17	遺構外	須恵器 坏	胴部～底部	- (1.8) 6.9	56.1	ロクロ成形。底部回転ヘラ削り。	φ1mm以下砂少量 φ3mm程礫少量 白色針状物質無量	良	外面	黄灰(2.5Y5/1)	南比企産
									内面	黄灰(2.5Y5/1)	
30-18 9（遺構外）18	遺構外	須恵器 坏	胴部～底部	- (1.2) (4.9)	53.0	右ロクロ成形。底部回転糸切り後に回転ヘラ削り。	φ1mm以下砂少量 φ3mm程礫少量	良	外面	黄灰(2.5Y6/1)	
									内面	黄灰(2.5Y5/1)	
30-19 9（遺構外）19	遺構外	青磁 碗	底部	- (2.1) (5.0)	41.5	ロクロ成形。削り出し高台。青磁釉。	φ1mm以下砂少量	良	外面	オリーブ黒(7.5Y6/3)	12～13世紀、中国龍泉窯
									内面	オリーブ黒(7.5Y6/3)	
30-20 9（遺構外）20	遺構外	陶器 皿	底部	- (2.1)	9.3	ロクロ成形。貼り付け高台。志野釉。	φ1mm以下砂少量 φ1mm以下礫少量	良	外面	灰白(2.5Y8/1)	17世紀、美濃窯産
									内面	灰白(2.5Y8/1)	
30-21 9（遺構外）21	遺構外	陶器 碗	底部	- (1.4) 5.3	70.8	ロクロ成形。削り出し高台。灰釉。底部中央に「唐」の字を焼刻。	φ1mm以下砂少量	良	外面	淡黄(2.5Y8/4)	近世
									内面	灰白(2.5Y8/2)	
30-22 9（遺構外）22	遺構外	陶器 徳利	胴部～底部	- (2.9) (7.8)	135.4	ロクロ成形。削り出し高台。灰釉。一升徳利。	φ1mm以下砂少量 φ1mm以下白色粒子中量	良	外面	にぶい黄(2.5Y6/3)	近世、瀬戸・美濃産
									内面	にぶい黄(2.5Y6/4)	
30-23 9（遺構外）23	遺構外	陶器 灯明受け皿	口縁～底部	(11.0) 2.3 (4.6)	61.1	ロクロ成形。底部回転ヘラ削り。鉄釉。受け部貼り付け。	φ1mm以下砂少量	良	外面	暗赤褐(5YR3/4)	近世、瀬戸・美濃産
									内面	にぶい赤褐(5YR5/4)	
30-24 9（遺構外）24	遺構外	土製品 土人形	-	(3.7)	25.3	型内ナル成形。内面指頭痕。旭人形か。	φ1mm以下砂少量	良	外面	灰白(10YR8/2)	為器か
									内面	灰白(10YR8/2)	
30-25 9（遺構外）25	遺構外	瓦 丸瓦	-	- (7.6) -	418.8	たたき成形。巴文様。	φ1mm以下砂少量 φ1mm以下白色粒子中量	良	外面	褐灰(10YR6/1)	近世
									内面	褐灰(10YR6/1)	

第 20 表　遺物出土点数・重量一覧

遺構	土師器		ロクロ土師器		須恵器		陶磁器・灰釉陶器		その他						合計	
	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	土器	土製品	瓦	その他	重量（g）		点数	重量（g）
SX01	300	8,692.9			10	221.4	6	98.9	1		1	7	516.8		325	9,530.0
SX02	43	1,872.5			13	303.6						1	253.3		57	2,429.4
SD01	57	411.6			15	265.1	1	40.0							73	716.7
SD02	170	1,658.2	3	29.1	29	406.5	1	48.0	2	1			40.4		206	2,182.2
SD03	1,191	8,745.1	49	1,605.3	204	5,185.0	5	500.7	7	1	1	8	265.3		1,466	16,301.4
SD04	24	242.8	2	17.0	43	1,498.0	2	18.5		1		2	706.9		74	2,483.2
SD06	12	94.2			7	74.3						1	3.7		20	172.2
SD07	10	90.2	1	30.5	4	50.2									15	170.9
SD08	102	1,136.0	2	13.6	17	120.8									121	1,270.4
SD09	14	84.3													14	84.3
SK01	18	355.8			1	1.2									19	357.0
SK02	9	71.6													9	71.6
SK03	1	36.6													1	36.6
SK04	26	426.6	1	16.8	24	732.9									51	1,176.3
SK05	4	17.0													4	17.0
P01	2	15.6													2	15.6
P05	2	4.3													2	4.3
不明遺構	1	5.8													1	5.8
遺構外	**1,108**	**5,991.1**	**47**	**233.5**	**176**	**2,603.4**	**41**	**1,252.4**	**20**	**1**	**9**	**1**	**1,193.1**		1,403	11,273.5
合計	**3,094**	**29,952.2**	**105**	**1,945.8**	**543**	**11,462.4**	**56**	**1,958.5**	**30**	**4**	**11**	**20**	**2,979.5**		**3,863**	**48,298.4**

第３章　まとめ

前谷１次では、弥生時代後期後半から古墳時代前期の周溝状遺構２基、土坑１基、平安時代以降の溝状遺構８条、土坑４基、ピット４基を検出した。以下に各時代について述べる。

１　弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構・遺物

弥生時代後期後半から古墳時代前期では周溝状遺構２基、土坑１基を確認した。第１号周溝状遺構は、調査区中央に位置し、全体を調査した。開口部を南西側にもつ。福田聖氏は周溝持ち建物の可能性が高い遺構としている。出土遺物は、壺・甕・高坏を主体としている。壺は最大径を胴部下端にもつ下膨れ状のものと、胴部中央にもつ球胴化しているものがある。この内下膨れ状の壺（図 16―１）は、全高 18.9cm の小ぶりの壺で、複合口縁部は４本１単位の棒状浮文と斜状縄文を施文し、棒状浮文間には円形朱文を配置する。市内では類例が少ない土器で、近い形状のものとして前谷３次第１号井戸跡出土の壺があげられる。球胴化している壺（図 16 － 15）は口縁部が破損しており全体の形状は不明であるが、胴部は斜縄文をＳ字状結節文で区画する文様帯を配置し、文様帯上部に円形浮文をつける。底部は中央部分が欠損しているが、内外面からの打刻痕が確認できるため、本報告では欠損としているが、底部穿孔土器の可能性もある。高坏（図 17 － 21）は１点のみではあるが、口縁部が強く外反し内外面を赤彩するもので、長野県の箱清水式土器と形状が近い。前谷遺跡では、前谷９次第４号溝状遺構で、箱清水系の高坏が出土しており、長野方面との関係性があった可能性がある。

時期について『調査概要』では古墳時代前期の五領式期としているが、甕は口唇部にキザミがつき、頸部は緩やかな屈曲を呈するものが主体で、壺は胴部下膨れ状のものと胴部に文様帯を持つものが検出されていることから弥生時代後期末、遅くとも古墳時代前期初頭の時期と考えられる。

第２号周溝状遺構は、調査区西壁際で検出し、全体の４分の１程を調査した。平面状は、円形もしくは隅丸方形を呈し、最大幅は 0.7m と狭い。遺物は壺胴部、広口壺、高坏などが出土している。壺（図 18 － 3）は胴部が球胴化し文様は施文されていないため、第１号周溝状遺構よりも新しいと考えられる。

低地で検出されている周溝状遺構については、方形周溝墓と周溝持ち建物が混在していることが指摘されている。前谷遺跡では前谷９次の第４号溝状遺構は略完形の土器が多数出土したため、方形周溝墓の可能性が指摘され、前谷３次の第１～４号周溝状遺構は切り合いの激しさと、周溝内に４本の柱穴を検出しているため周溝持ち建物と指摘されている。

本調査の第１・２号周溝状遺構は方台部にはピット・土坑などの構築物は確認できず、また出土遺物も完形のものが少ない。ただし、同時期の遺構との切り合い関係が無いことや、口縁部が外反する箱清水系の高坏が出土している点は、方形周溝墓の可能性が高い前谷９次第４号溝状遺構と共通性があるため、今後の調査を行う中で判断していく必要がある。

2　平安時代以降の遺構・遺物

平安時代以降の遺構では、溝状遺構８条と土坑４基を検出した。この内第３号溝状遺構からは、９世紀初頭から 10 世紀までの遺物が多数出土している。長期間にわたって略完形の遺物が複数出土することは、単独の遺構として想定しづらい。３号溝状遺構出土遺物については、遺物の検出状況を示す図面・写真がないため正確なところは不明であるが、平面図では北西側の細い溝と南西側が広い溝の２つの形状が確認できるため、同一遺構ではなく２つの遺構が切り合っていた可能性がある。また、その他に切り合い関係のある第１・７号溝状遺構、第３号土坑の遺物も含まれている可能性がある。

出土した遺物は須恵器とロクロ土師器が多く、土師器は甕を主体とし坏は少ない。須恵器は南比企産と東金子産が半分程度とみられる。ロクロ土師器の重量比率は須恵器と比較すると 20％程であるが、出土したロクロ土師器は全体的に摩耗しロクロナデや底部調整が確認できないものが多く、小片では土師器と区別がつかない。実測した遺物で比較すると、須恵器坏・皿 20 点に対し、ロクロ土師器坏・皿は 18 点とほぼ拮抗しているため、須恵器・ロクロ土師器を主体とする集落であったと考えられる。

埼玉県のロクロ土師器は、大宮台地の下野田稲荷原遺跡で焼成土坑が確認され、下野田稲荷原型のロクロ土師器が大宮台地・元荒川流域一帯に流通していたとされる。今回検出したロクロ土師器も下野田稲荷原型と似ているものが多く、荒川低地も流通圏としていたと考えられる。

この他、内面及び外面の一部を黒色処理しているロクロ土師器を４点（図 23 － 9 ～ 12）検出した。全体的に器壁が薄く、内面は横ミガキで調整している。底部を確認できるものは高台を貼付ける。灰釉陶器の深碗を模倣したものと考えられ、埼玉県内の出土事例や灰釉陶器の編年を考えると 10 世紀中頃以降の可能性がある。

灰釉陶器は碗・皿・長頸壺５点（図 25 － 56 ～ 60）を検出し、その他に東海系の須恵器皿１点（図

24 － 48）を検出した。碗・皿の高台は、角高台と三日月高台が混在している。また、長頸壺の頸部は広頸化していないため、K － 90 期の前半から中頃の時期で、9 世紀中頃から後半と考えられる。

前谷遺跡では、前谷２・４次で瓦塔の一部が、前谷 10 次で丸鞆が出土し、調査地北側では平安時代の火葬墓の可能性がある土坑が検出されている。いずれも当該期の有力者層の存在を推測できるもので、今回報告した灰釉陶器や内面黒色処理のロクロ土師器碗もその可能性を補強する遺物である。

なお、『調査概要』では、第４号溝状遺構について城館を廻る堀の可能性を指摘している。今回の整理では、平安時代の土師器、須恵器を多数確認したが、中世の遺物は陶器片２点のみだったため平安時代の遺構とした。

3　まとめ

前谷遺跡では、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の遺構は多く確認されていたが、出土遺物が少なく、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の間の土器については不明な点が多かった。今回第１・２号周溝状遺構出土遺物を整理したことで、出土遺物を多数確認し、同時期の土器の様相が明らかとなった。

また、平安時代の遺構からは、灰釉陶器や内面黒色処理したロクロ土師器を確認し、有力者層が居住していた可能性を裏付けることができた。また、多数の須恵器・ロクロ土師器を確認し、大宮台地や比企地域・入間地域との交流・交易の様相を明らかにすることができた。

参考文献

赤熊浩一
『前谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 394 集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2012
今井源吾
『前谷遺跡ＸⅠ』戸田市教育委員会　2022
「前谷遺跡の弥生時代後期から古墳時代前期の編年について」『研究紀要』32　戸田市立郷土博物館 2024
今井源吾ほか
『前谷遺跡ⅠＸ』戸田市教育委員会　2021
『前谷遺跡Ｘ』戸田市教育委員会　2021
岩井聖吾
『前谷遺跡Ⅱ』戸田市教育委員会　2014
『前谷遺跡Ⅳ』戸田市教育委員会　2015

尾野善裕
「「戊申年木簡」・尾張国分寺と猿投窯―猿投窯系須恵器編年の再構築・補論―」『須恵器生産の出現から消滅』第５分冊　補遺・論考編　東海土器研究会　2001
昼間孝志
「ロクロ土師器の流通」『古代武蔵国の須恵器流通と地域社会』埼玉考古学会　2006
福田聖
『低地遺跡からみた関東地方における古墳時代への変革』六一書房　2014
渡邊理伊知
「武蔵国からみた黒色土器の消長と展開」『研究紀要』33　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　2019

写　真　図　版

鍛冶谷・新田口遺跡第 12 次調査

（図版１・２）

前谷遺跡第１次調査

（図版３～９）

図版 1

1　調査区完掘　（南西から）

2　第１号柵跡完掘　（南東から）

3　第２号・第３号ピット断面　（南東から）

4　第２号ピット完掘　（南東から）

5　第４号ピット断面　（北から）

6　第４号ピット完掘（北から）

7　第５号ピット断面　（西から）

8　第５号ピット完掘　（北西から）

1　第 7 号ピット完掘　（北から）

2　第 8 号ピット完掘　（北から）

3　第 1 号溝状遺構断面（南から）

4　第 1 号溝状遺構完掘（南から）

鍛冶谷・新田口 12 次出土遺物

第 1 号溝状遺構

遺構外出土

図版 3

1　第１号周溝状遺構　（北東から）

2　第１号周溝状遺構遺物出土状況

3　第２号周溝状遺構（西から）

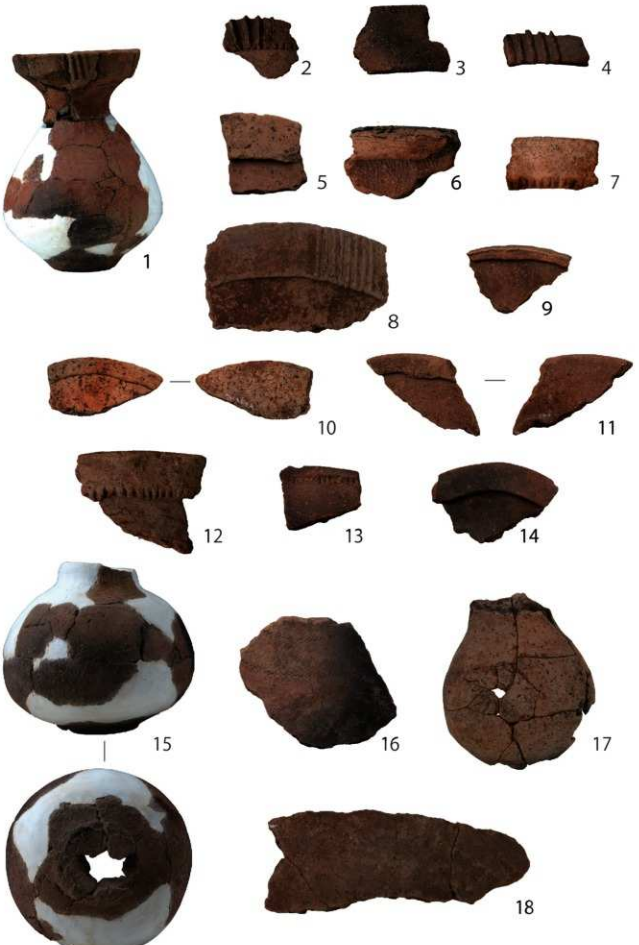
4　第２号周溝状遺構遺物出土状況

5　第１・３号溝状遺構（北西から）

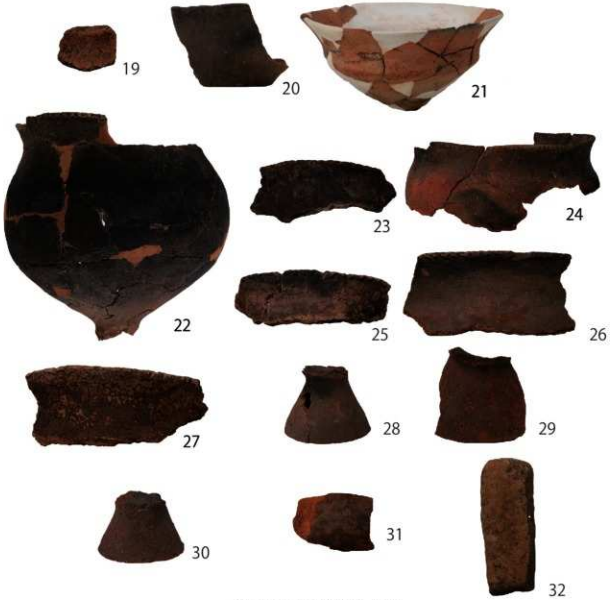
6　第２号溝状遺構（南東から）

7　第４号溝状遺構　（南東から）

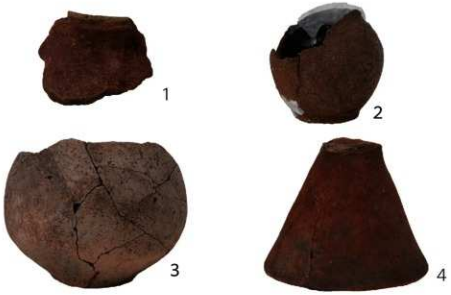
8　第３号土坑（北東から）



第１号周溝状遺構（１）



第１号周溝状遺構（２）

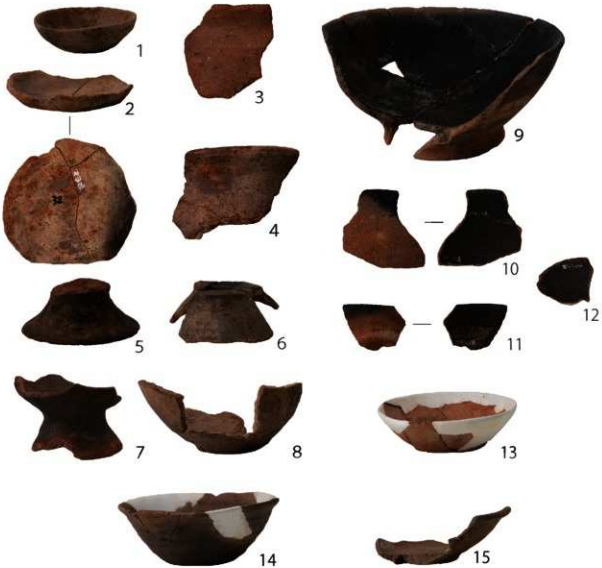


第２号周溝状遺構

第３号土坑

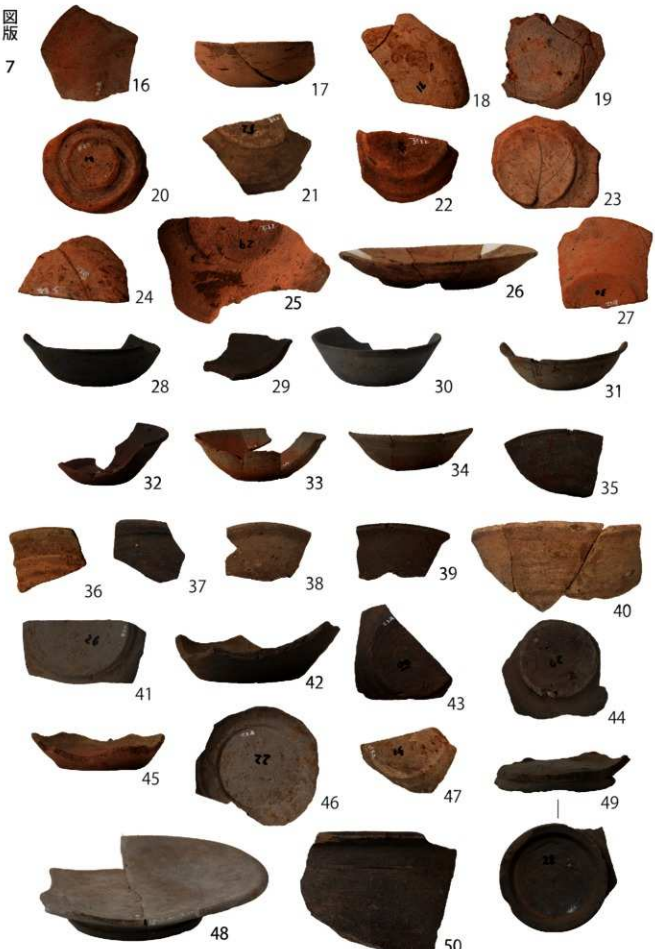
第１号溝状遺構

第２号溝状遺構



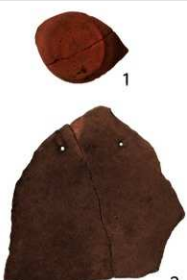
第３号溝状遺構（１）

図版 7



第３号溝状遺構（２）

第３号溝状遺構（３）



第４号溝状遺構

第７号溝状遺構

第８号溝状遺構

第１号土坑

図版 9

第４号土坑

遺構外出土

報告書抄録

ふりがな	かじや・しんでんぐちいせきじゅうに　まえやいせきいち　まいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ
書名	鍛冶谷・新田口遺跡ⅩⅡ　前谷遺跡Ⅰ　埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	戸田市文化財調査報告
シリーズ番号	37
編著者名	今井　源吾
編集機関	戸田市教育委員会
所在地	〒335－8588　埼玉県戸田市上戸田 1-18－1　℡ 048（441）1800
発行年月日	2024（令和6）年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
かじや・しんでんぐちいせき 鍛冶谷・新田口遺跡 だいじゅうにじしらべ 第12次調査	とだし　かみとだ 戸田市上戸田 5丁目13番地6	11224	06－001	35° 81′ 28″	139° 67′ 19″	2021.9.29 ～ 2021.10.12	28.3	個人住宅 建設
まえやいせきだいいちじしらべ 前谷遺跡第1次調査	とだし　かみとだ 戸田市上戸田 2丁目26番3	11224	06－003	35° 81′ 37″	139° 67′ 99″	1972.8.23 ～ 1972.9.6	457	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鍛冶谷・新田口遺跡 第12次調査	集落跡	弥生時代後期後半～古墳時代前期	柵跡　1基 ピット　4基	土師器	
		近世～近代	溝状遺構　2条 土坑　1基 ピット　1基	陶磁器 瓦	
前谷遺跡第１次調査	集落跡	弥生時代後期後半～古墳時代前期	周溝状遺構　2基 土坑　1基	土師器	第１号周溝状遺構から箱清水式系の高坏が出土した。
		平安時代以降	溝状遺構　8条 土坑　4基 ピット　4基	土師器 ロクロ土師器 須恵器	第３号溝状遺構からは灰釉陶器、内面を黒色処理したロクロ土師器が出土した。

要約

鍛冶谷・新田口遺跡第12次調査は、周知の埋蔵文化財包蔵地である鍛冶谷・新田口遺跡の包蔵地範囲に属し、JR埼京線戸田駅から南に約560mの戸田市上戸田５丁目13番６に所在する。

調査の結果、弥生時代後期後半から古墳時代前期の柵跡１基、ピット４基、近世から近代の溝状遺構２条、土坑１基、ピット１基を検出し、微高地の縁にあたる地点の開発状況が明らかとなった。

前谷遺跡第１次調査は周知の埋蔵文化財包蔵地である前谷遺跡の包蔵地範囲に属し、JR埼京線戸田駅から東に約１kmの戸田市上戸田２丁目26番３に所在する。昭和47年に店舗建設に伴う発掘調査を行い、弥生時代後期後半から古墳時代前期の周溝状遺構２基、土坑１基、平安時代以降の溝状遺構８条、土坑４基、ピット４基を検出した。

昭和53年に『前谷遺跡発掘調査概要』を刊行し、令和４年度から令和５年度にかけて出土遺物の再整理を行った。弥生時代後期後半から古墳時代前期では、第１号周溝状遺構から出土した箱清水式系の高坏を確認した。平安時代では、第３号溝状遺構から内面黒色処理したロクロ土師器を複数確認した。

戸田市文化財調査報告　37

鍛冶谷・新田口遺跡ＸⅡ
前　谷　遺　跡　Ⅰ
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

発行・編集　埼玉県戸田市教育委員会
〒335－8588　埼玉県戸田市上戸田１－１８－１
Tel 048（441）1800
印　　刷　関東図書株式会社
〒336－0021　埼玉県さいたま市南区別所３－１－１０
発 行 日　令和６年３月31日